2 / 3

單一産無政黨

特218
749

384

山川均
著

文藝戰線叢書
2

0034685000

0034685-000

特２１８－７４９

単一無産政党論

山川均・著

文芸戦線出版部

昭和５

AGC

無產政黨論

山川均著

1930

文化學院出版部發行

特218
749

萬國の勞働者 團結せよ!!

單一無產政黨論

山川均著

文藝戰線叢書 2

1930

文藝戰線社出版部 版

はしがき

この小冊子に收めた二つの論文の間には、まる二十四ヶ月の歳月の流れが挿まれてゐる。從つて、私がこの二つの論文を草しつゝ、眼前に置いてゐた實際運動の形勢には、非常な相異があつた。たゞどちらの場合にも、政治戰線の統一、對立政黨の合同、單一共同戰線黨の實現——少なくとも即時の、または極めて近い將來における實現——に何らの希望をも懸け得ぬ形勢にあつたといふ、唯一の共通點を除いては。

×

私が第一の論文を書いた昭和二年の後半は、極左分裂主義の全盛期であつた。一方には、あくまで「右翼政黨」として固定しようとする右翼指導者の意識は、既に明白になつてゐた。しかるに戰線統一の主たる動力となるべき左翼分子の壓倒的な大多數は、完全に謂ゆる「宗派的分裂主義」の影響下にあつた。この二つの反動主義と闘爭してこれを克服せぬ限り、政治戰線の統一は、全く望みのない狀態にあつた。ことに小兒病的極左主義との闘爭によつて、左翼大衆をその影響から解放し、正しい左

翼的方向の生長と確立とを促がすことによつてのみ、初めて戰線統一に眞實の動力を供給することができた。當時はたゞ戰線の統一、對立政黨の合同を公然と主張することさへも、ひとり右翼指導者の嘲笑を買つたばかりでなく、それは左翼陣營においても許すべからざる罪惡とされ、極左主義の指導者とその宗派的組織とは、これに『日和見主義』『組合主義』『折衷主義』『解黨主義』『反マルクス主義』『階級的裏切り』その他一ダース有餘の烙印を捺して、大衆的政黨や勞働組合からさへも排除しようとした。現に大正八—九年以降の組合運動の鬪爭が生んだ有爲な指導者にして、彼らの見解に迎合しなかつたために、この時期に、運動から葬り去られた者が少くない。そして多くの者は、その地位に對する脅威から、彼らの見解に追隨した。その結果が、いかに慘憺たる事象を生みだしたかは、間もなく實證せられた通りであつた。

私が第一の論文を書いたのは、恰かもかういふ形勢の下においてゞあつた。從つて、それは勢ひ、かうした當時の形勢を反映する。そして私の批判は、主として流行の極左主義に向けられてゐる。

×

政治戰線の統一を主要なスローガンとする雜誌『勞農』の創刊號の實現に先だつて、『宗派的分裂主義者』は率然としてその主張を翻へし、彼らの巢くふ舊勞働農民黨をして、合同提議のマヌーヴ

ーを試みしめた。かゝるマヌーヴァーが、戰線統一の上に何らの效果をも齎らさぬことは無論であつて、彼らもまた、固よりそれを望まなかつたに違ひない。たゞ彼らは、大衆をして合同の失敗を經驗せしめることによつて、合同論に對する信頼を失はしめようとする若干の効果を收めることができた。

無產政黨の合同が、具體的な一歩を進めたのは、一年後における、かの七黨合同による日本大衆黨の成立であつた。この合同の主たる動力となつたものは、舊勞働農民黨の內部にあつて極左分裂主義の指導に對立し來つた分子と、舊日本勞農黨の左翼的分子とであつた。

日本大衆黨は僅々數ヶ月後に分裂しだばかりでなく、この分裂の作用は、尙ほ半年間に亙つて繼續した。これは右翼指導者と極左指導者とに、單一政黨の不可能がその主張者自身の實踐によつて、決定的に實證せられたと叫ぶ口實を提供し、彼らの『左翼政黨』と『右翼政黨』との主張に口實を與へたばかりでなく、大衆の間にも、かゝる主張を受け容れ易い心理狀態を作り出した。大衆は戰線統一に對する自信と熱情とを失ひ、よし一時的にもせよ、統一に對する下からの拍力は、著しく消滅した。そして單一共同戰線黨の實現に努力し來つた人々の間においてさへも、若干の懷疑と動搖とが現はれた。

かうして二ケ年間の戰線統一運動の後に、わが國の無產階級政治運動の戰線には、社會民衆黨、日本大衆黨、新勞農黨の三つの全國的政黨と、これらのいづれによつても包容することの出來ない（そして最近に地方政黨協議會を組織した）宮城無產黨、岩手無產黨、千葉勞農黨、大和無產統一黨、勞農大衆黨、中國無產黨の六政黨のほかに、中部民衆黨、關西民衆黨等がある。しかるに社會民衆黨の分裂は、全國政黨にもう一つを加へ、日本大衆黨から排除せられた分子による東京無產政黨と秋田地方政黨との組織は、地方政黨に二つを添へる。廣くもない日本のうちに、一ダースと二つの無產政黨が押すな押すなの盛況を呈してゐることは、壯觀でないならば奇觀であつて、まさに分裂主義の全盛期を出現したものと云つてよい。單一共同戰線黨の實現が、決定的に不可能となつたか否かは暫らくおき、少なくとも今日は、分裂主義の全勝の時代であつて、戰線統一への勢力は、殆んど全くその作用を痲痺せられ、吾々はいづれの處にも、戰線統一の方向に現に有力に働いてゐる何らの力をも見出だすことができぬ。

私が第二の論文を書いたのは、かういふ形勢の下においてであつた。

×

それが何らかの意義を持ち得るだらうか？　單一共同戰線黨の實現の希望の最も少ない瞬間に、單

一共同戰線黨を語ることは、右翼指導者から「統一病者」の囈言といふ嘲笑を買ふこと以外に、何らかの效果があるだらうか？　文藝戰線出版部が、特にこの時期を選んでこの小册子の刊行を決意されたことは、この疑問に對して肯定的な答を與へたことを意味してゐる。私としては、たゞ次の事柄に讀者諸君の注意を喚起するにとゞめたい。――即ちわが國の勞働者と農民と勤勞大衆とが、政治的に四つの全國政黨と八つの地方政黨とに分れてゐることに、何らかの社會階級的な必然があるだらうか？　無產政黨の極度の分裂狀態そのことが、寧ろ現在の政黨分野の動搖性と不安定性とを物語つてゐるものではなからうか？　そしてこれらの事柄は、わが國における無產政黨の現狀を以つて、なほ形成の過程にあるものとする吾々の見解を裏書きするものではあるまいか？

×

大正十四年における最初の單一政黨の企てが失敗に歸して以來、わが國の運動は、既存の勢力の分裂對立の一途を走つて來た。その間には七黨合同の如き挿話があるが、これとても、僅かに反對作用がその動きを見せたといふだけであつて、大體の傾向を如何ともすることができなかつた。そして今日は、分裂對立への傾向は、殆んどその極點に近づいたものと見做される。その結果は戰線の統一に對してばかりでなく、政黨運動そのものに對して大衆の興味を失はしめ、或る時間の間、政治運動の

沈滯期を來たすべき微候さへも現はれてゐる。先進分子の任務は、かゝる現狀に對して、徒らに歎息することではない。況んやこの事實に眼を閉ぢて、自ら欺くことはできない。先進分子の任務は、現實を大膽率直に承認し、そのうちから教訓を得、そして來るべき新しい時期と新しい機運に準備することでなければならぬ。

×

本書に收めた第二の論文は、かような戰線統一の運動に取つての最惡の形勢の下において、今日まで吾々の主張し來つた（そしてその實現のために努力し來つた）單一政黨、若くは共同戰線黨とは、そも〳〵どのような性質の政黨であつたか（またこの主張の出發點からの當然の結論として、それはどのような性質の政黨でなければならなかつたか）を、靜かに再吟味しようとしたものであつた。私はこれらの點について、許された紙數の範圍内において、出來得る限り詳細に說明しようとした。しかし、尙ほ說明を要する多くの點が殘つてゐる。若し事情が許すなら、私は近い將來に、別の論文でこれらの點をも補ひたいと思ふ。

昭和四年十二月三十日

著　者

目　次

政治的統一戰線へ！（無產政黨合同論の根據）……（一）

（一）吾々の政治鬪爭の對象は、ブルジョアの政權である。

（二）ブルジョアの政權は、如何にして確立せられたか？

（三）それは今、如何なる發展段階にあるか？

（四）プロレタリアの一般戰略と、無產政黨の性質および任務。

（五）無產政黨の對立とその性質。

（六）政治戰線の統一と左翼の任務。

（七）政治的統一戰線へ！

無產政黨問題の再吟味……（八五）

（一）戰線統一問題の現狀。
（二）共同戰線黨とは何だつたか？
（三）種々なる反ブルジョア社會勢力の結合。」
（四）鬪爭の種々なる發展段階の結合。
（五）英國からの若干の實例。
（六）共同戰線の諸形態。
（七）共同戰線黨とプロレタリア前衛黨。
（八）單一政黨の實現は可能であるか？

單一無產政黨論

政治的統一戰線へ

——無産政黨合同論の根據——

（一）吾々の政治闘爭の對象は、ブルジョアの政權である。
（二）ブルジョアの政權は、如何にして確立せられたか？
（三）それは今、いかなる發展段階にあるか？
（四）プロレタリアの一般戰略と、無產政黨の性質及び任務。
（五）無產政黨の對立とこの對立の性質。
（六）政治戰線の統一と左翼の任務。
（七）政治的統一戰線へ！

（一）吾々の政治的闘爭の對象は ブルジョアの政權である

吾々の政治的闘爭の對象は、帝國主義的ブルジョアの政治權力である。これはほとんど自明のことからであつて、わが國資本主義の現在の段階は獨占的金融資本の時代であるといふことが、一般的には、すでにこのことを金著してゐるのである。

これに反して吾々の政治的闘爭の對象を、帝國主義的ブルジョアの支配以外の何ものかに求めることは、わが國資本主義發達の現在の段階を、獨占的金融資本の支配以外の何ものかであると認めることを意味してゐる。

わが國の現在を、獨占的金融資本によつて率ゐられたブルジョアジーの完全な支配であると見る時に、ブルジョアジーとプロレタリアとは、初めて現在のわが國において、たゞに相對立した階級であるといふばかりでなく、正面から直接に相對峙したところのたゞ二つの階級であつて、現在のわが國は、無條件に、この二つの主要階級對立の社會であると云ふことができる。

であるから、わが國の現在を、ブルジョアジーの支配である——即ちわが國には、ブルジョアジー

の政權が完全に確立せられてゐる――と見ることによつてのみ、このブルジ■アジーに對する直接の決定的な反對勢力は、ひとりプロレタリアであると結論することができる。

これに反して、わが國の現在を、獨占的金融資本に率ゐられたブルジ■アジーの支配以外の何ものかであると理解したならば――たとへば現在のわが國を、政治的に一九〇五年のロシアと解したなら、いな一九一七年のロシアと解してさへも――その結果は當然に、支配階級とその同盟者として計上すべき階級と社會層、これに對する反對勢力――××階級とその同盟者――の欄に計上せられる階級と社會層とは、大に異なるにちがひない。一九一七年のロシアには、專制主義と對立するかぎりにおいては、大ブルジ■アさへも、なほ若干の革命的性質を保つてゐた。しかるに三月革命による專制政治の倒壞とブルジ■ア政府の出現とによつて、ブルジ■アジーのうちに殘されてゐた革命的潜勢力は發展し盡され、その革命的作用は中和され終つたのであつた。ブルジ■アジーが專制政治に對する反對勢力たる性質と作用とを全たく發散し終つた三月以後、ロシアのブルジ■アジーとプロレタリアとは、直接に相對峙するたゞ二つの主要な階級として、舞臺に現はれたのであつた。

吾々の政治的鬪爭の對象を、帝國主義的ブルジ■アジーの政權以外の何ものかであると理解することは、多かれ少なかれ、わが國の現在を、ブルジ■アジーとプロレタリアとが直接に對峙した狀態以外の何らかの狀態であると理解することを意味するものであつて、それはまた、プロレタリアがブルジ■アジーの政權と直接に對峙する場合とは、異つた對立勢力の計上をすることを意味して居り、從つてまた、それは必然に、プロレタリアがブルジ■アジーの政權と直接對峙してゐる場合に正當であり當然であるところの戰略及び戰術とは、多かれ少なかれ、異つた戰略と戰術との上に立たざるを得ないことを意味してゐる。(註一)

それ故に、吾々の政治的鬪爭の對象を、帝國主義的ブルジ■アの政權以外の如何なるものに求めるにせよ、いやしくもそれを帝國主義的ブルジ■アの政權以外の何ものかに置くことは、とりも直ほさず、プロレタリアの政治的鬪爭の鋭鋒から、ブルジ■アジーを庇護することを意味してゐる。

(註一) たとへば吾々の政治的鬪爭の對象は、ブルジ■アの政權ではなくて、絶對主義または專制主義であると解したなら、どうだらう？ この專制主義なるものは、帝國主義的ブルジ■アと如何に密接に『抱合』してゐようとも、なほ且つこの場合には、ブルジ■アジーの政權が確立され、プロレタリアが正面直接にこれと相對峙してゐる場合――これを政治的鬪爭の對象としてゐる場合――とは、勢ひ異つた階級または社會層を双方の勢力に計上しなければならぬ。プロレタリアの同盟者は、おのづから退つてくる。大ブルジ■アはこの專制主義と完全に抱合してゐるから致し方がないと假定しても、少なくとも小ブルジ■ア上層には、專制主義に對する限りにおいては、なほ××的作用と鬪爭の力とが殘つてゐる。言葉をかへて云へば、政友會と民政黨とは、この專制主義との抱合

者であるが少なくとも革新黨は、少なくともその左翼は、專制主義と勇敢に闘ふところの、プロレタリアの鋼もしい同盟者であるといふことになる。

現に、派的極左主義者の一群は、かくの如き見解を取つてゐる。彼らはかゝる見解から、過般の府縣會選擧に當つては、勞働者と農民とを背後に有する勞農政黨（社會民衆黨と日本農民黨）は徹底的に排擊し、急進ブルジョア黨たる革進黨とは、協同戰線に立つといふ奇妙な選擧政策を編み出した。そして彼らが官僚的に支配してゐるところの勞働農民黨をして、この奇妙な選擧政策（たしかたに世界に類例のない奇妙な『マルクス主義的』選擧政策）にもとづいて、實際に、府縣會選擧に臨ましめたのであつた。

この選擧政策は、次の諸點において、その矛盾者の小ブルジョア日和見主義的性質を證據だてゝゐる。

（一）急進ブルジョアを、その政治闘爭の同盟者に計上し、これに反して

（二）勞働者と農民との勢力を、敵の勢力に計上したことにおいて。

（三）日本勞農黨に對してのみは、協同戰線を是認したが、しかもそれはせいぐ、彼らの政治闘爭にとつては急進ブルジョアの黨たる革新黨と同列の性質を持つた勢力として取扱つたにすぎないことにおいて。

（四）以上の事實によつて、吾々の現在の政治闘爭を、反動的帝國主義的ブルジョアジーの支配に對する、プロレタリアを中心勢力とする一切の反ブルジョア勢力の闘爭と見ないで、專制主義に對する、一切の反專制主義勢力の同盟による、ブルジョア民主主義獲得の闘爭と理解してゐることを實證した點において。

（二）ブルジョアの政權は如何にして確立せられたか？

明治維新の革命は、わが國における封建主義社會から資本主義社會への推移を、正式に布告したものであつた。しかしながらこの革命の舞臺において、主役として觀客の前に活躍したものは、ブルジョアではなくて、主として武士の下層であつた。この配役は誰れがやつたのか？　それは未來の巨人たるブルジョアをその懷の中に育てゝゐたわが國の封建社會の特殊な事情のために、當時なほ、ブルジョアジーが幼弱であつたことゝ、この革命の直接の動機を作り出したわが國の特殊な歴史的事情とが、この役割を決定したのである。

けれどもこれは維新の革命から、專制主義に對するブルジョア革命たる性質を、少しも失はしめるものではない。この革命の主役を演じた下層武士は、もとよりブルジョアでないばかりでなく、彼らはもはや、その經濟上の基礎をもたない過去の階級であつた。けれども、彼らはその經濟的基礎をもたなかつたがために、新興ブルジョアの經濟的基礎の上に立ち、その階級的利害を代表することが、彼らに取つての唯一の活路であつた。

しかしながら明治維新のかような情勢の結果として、この革命によつて、政權は直接にブルジョア

ジーの手には移らないで、これらの指導分子の手に落ちた。こうして中世紀的な專制政府の跡には、ブルジョアジーに固有な民主的政府が生まれないで、過渡的中間的な政府――いはゆる藩閥政府――が出現した。そして完全にブルジョアジーの政權が確立せられるためには、その後の五十年の歲月が必要であつた。かように明治維新は、その本質においては、ブルジョア革命であつたが、それはブルジョアの革命を完成したものではなくて、その發端であつたといふことができる。

新興ブルジョアの階級的利害は、この半專制政府によつて代表せられ、その保護政策の翼の下で、わが國のブルジョアジーとその資本とは、急速に生長した。「藩閥」はもとより、それ自身の固有な何らの經濟的基礎をも有しない、そこで一方には新興のブルジョアジー、他方には、もはや專制主義の經濟的基礎とはなり得ない、變質した、また變質しつゝある地主階級――この二つの勢力の上にその政權の基礎を求めることが、彼らの謂ゆる「國家大局」の見地と名づけるものであつた。

この半專制政府の下に、國家資本もまた急速に生長し、それは資本主義經濟のうちに、極めて重要な役割を占めるものとなつた。この間に、地方的意義をもつた「藩閥」は、その半專制政治のうちにはぐゝんだ官僚と軍閥とに、漸次にその形を變へた。官僚軍閥もまた、もとより固有な經濟的基礎を有しない。けれども國家資本が異常な生長をするにいたつて、彼らはおのづから、この經濟的基礎の上に立つものとなつた。その結果は、官僚軍閥はブルジョアジーに對立する勢力として、その發達をつづけるものではないかといふ疑問をさへも、少なくとも或る時期の間は抱かしめるに足るものがあつた。（註二）

（註二）現に私は、暫く僅かの期間ではあるが、この傾向を過大視して居つた。けれどもその後の推移は、この事劇主義的反動勢力の殘存物が急速にブルジョアジーに「同化」せられてゆく事實により、かような觀察の全く誤つてるたことを證據だてた（小著『無產階級の政治運動』二八一頁）。

かように或る時期の間は、新たな經濟的基礎を得てブルジョアジーに對峙して存續し、或はさらに對峙して發達するかの如くにさへも見へた專制主義のすでに變質した殘存勢力は、その後の資本主義的發展によつて、急速にブルジョアジーの勢力と「抱合」し、かつ同化された。（註三）ブルジョアジーがこの專制主義的殘存勢力を同化することは、少なくとも次の如き主要な條件によつて、初めて急速に行はれたものであつた。即ち第一には、資本主義の急速異常な發展によつて、ブルジョアが階級的に成熟し强大となつたこと。第二には、資本の急速異常な生長により、國家資本そのものも、もはや往日のような、民間資本に對する獨立性と對立的な重要性とを減じたこと（それは今日では、大財閥の勢力の浸入によつて、民間資本との對立性を殆んど失つてゐる）。第三には、農業が重要性を失ひ、

かつ地主そのものもまた資本家化したゝめに、もはやブルジ・アジーに對立した政治勢力の基礎としての重要を失つたこと。第四には、この時すでに、わが國の資本主義は明白に帝國主義的性質を帶び、獨占的金融資本の支配が擴大しかつ強固となるに從つて、ブルジ・アジーはまま〳〵反動的な性質を帶びるにいたつたこと、そしてこれは專制主義の殘存勢力がブルジョア化し、ブルジ・アジーがこれを同化することを、極めて容易ならしめたといふことである。

（註三）かつて私は、專制主義的殘存勢力と、反動化したブルジ・アジーとの『抱合』といふ言葉を用ひたが、それは常に、次の如き意味をもつて用ひられてゐる。『私は便宜のために、封建的殘反動勢力と資本主義的新反動勢力との抱合といふ言葉を用ひてゐる。けれども日本の現在の資本主義のうちに、この二つのものが別々に存在してゐると考へてはならぬ。この二つの反動勢力は、資本主義の現在の段階のうちに、有機的に化合してゐるものである』（『無產政黨の研究』一七四頁）。

しかるに最近には、この『抱合』といふ言葉は、專制主義的殘存物とブルジ・アジーとの間の、全く異つた關係を言ひ表はすためにも用ひられてゐる。即ち、わが國現在の資本主義社會には、この專制主義的殘存物がそのまゝの性質をもつて、ブルジョアジーの勢力から獨立して存してゐる、そしてわが國を政治的に支配してゐるものは、この專制主義的殘存物――いな『絕對專制主義』そのもの――であつて、ブルジョアジーはこの勢力と『抱合』することにより、この勢力によつて支持せられてゐる、等々といふ見解がそれである。

かの宗派的分裂主義者の一群は、この『抱合』といふ言葉を、吾々とは全く異つたかような意味に用ひてゐる。

ところが極く最近にいたつては、宗派主義者の或ものは、『有機的に化合してゐる』といふ私の用語をとらへ、私の見解は、兩勢力の機械的な結合であるとつぶやいてゐる。もちろん專制主義も資本主義も、化學上の原素ではないのだから、宗派主義者が心配するように、試驗管の中で『機械的』に化合する氣遣ひはない！　これに反して私が『化合』といふ言葉を用ひたのは、舊反動勢力が、その本來の專制主義といふ性質を保ちつゝ、反動化したブルジョアジーと機械的に結合してゐるものではない、といふことを言ひ表はそうとしたものにほかならぬ。由來、吾々の見解に對する宗派主義者の一切の批評は、この種の揚げ足取りの水準から一歩も出てをらぬ。彼らの宗派的性質は、必然に、彼らの理解力に限界を置いてゐる。

この同化の過程は、決して何らの摩擦と軋轢なしに進行したものではない。けれどもそれと同時にブルジ・アジーは、その政權を確立するために、專制主義の變質した殘存物と、決定的な正面衝突をする必要を見なかつた。優越的な國家資本の上に立脚して、傲然としてゐた時期においてさへも、官僚軍閥は、ブルジ・アジーの重要な利害に反し、これと根本的に對立することはできなかつた。ブルジ・アジーはまた、彼らの帝國主義的政策を必要としたからである。

かように明治維新によつて、專制主義に代はる自分自身の支配への一歩を踏み出したわが國のブルジ・アジーは、その殘存勢力と決定的な鬪爭をする代りに、ブルジ・アジー自身の階級的生長と階級的成熟とが必要とする度合だけづゝ（もしくはブルジ・アジーに取つて必要でなくなつた度合だけづ

と）これを同化して往つた（もちろん、時としては、これを拂ひのけたこともある）。こうして偉大な消化器を備へたわが國のブルジ・アジーは、ほとんど一切の專制主義的殘存勢力と殘存制度とを平然として嚥み下だし、その血と肉とに同化して肥つてゐる。わが國におけるブルジ・アの政權は、いつ確立せられたか？　何人も、何月何日といふ日附を指し示すことはできぬ、けれども政黨内閣制が事實上において確立せられたことは、ブルジ・アジーの政權が、もはや完全に確立せられたことを意味してゐる。

もとよりこの同化の作用は、完全に終了せられたものではない。この作用はなほ進行しつゝある。貴族院、樞密院の如き殘存制度のブルジ・ア政黨化は、なほその進行をつゞけるに相違ない。地主階級は今日以後においても、いよ〳〵ます〳〵ブルジ・ア化するにちがひない。けれども同化し切らないものがなほ殘つてゐるといふことは、わが國の現在に、獨占的金融資本によつて率ゐられたブルジ・アジーの政權が確立せられてゐるといふことを、少しも妨げるものではない。それはちようど經濟上の方面では、農業や手工業のような中世紀的な生產方法の變質した殘存物が存在してゐるといふことが、現在の社會が資本主義社會であるといふことに、何らの妨げともならぬのと同じである。

ブルジ・アジーの政權が確立した時に、プロレタリアは初めて直接にこれに對峙した勢力として、政治的鬪爭の舞臺に登場する。吾々の政治的鬪爭の對象は、專制主義的殘存勢力を同化して强大となつたところの、帝國主義的・反動的・ブルジ・アジーの政權である。

（三）それは今、どのような段階にあるか？

一般的には、わが國のブルジ・アジーは、もはや確實に、その政權を確立した。プロレタリアは、このブルジ・アジーの政治勢力と、正面直接に對峙せしめられてゐる。

けれども具體的には、現在の瞬間において、ブルジ・アジーの政治勢力は、どのような發展の段階に立つてゐるだらうか。それは今、漸やくその經濟的支配を確立した獨占的金融資本に照應するところの反動的・帝國主義的な、强大な政治勢力として急速に結成しつゝある。獨占的金融資本に率ゐられたブルジ・アジーは、いまやそのうちに同化することのできる一切の勢力を同化し、同盟を結ぶことのできる一切の要素と緊密な同盟を結び、いやしくもその影響と指導の下に獲得することのできる有らゆる階級と社會層との上に、その影響と指導とを擴大し、かくすることによつて、資本主義の新たな發展段階――金融資本と帝國主義の段階――に應じた强大な政治勢力――反動的・帝國主義的勢力――にまで結成しつゝある。そしてこの結成の作用が、急速に進行してゐること、これが現在の瞬間

におけるわが國の政治的形勢の、最も著るしい特質なのである。

反動的・帝國主義的政治勢力の急速な結成は、いろ〳〵の方向に向つて、いろ〳〵の形をとつて現はれてゐる。

まづ第一には、さきにも指摘したように、資本主義の發達に伴うてすでに著るしく變質せしめられてゐるところの、謂ゆる封建的殘存勢力が、さらにこの時期において、急速にブルジ・アジーの勢力に同化せられてゐることである。貴族、官僚、軍閥等は、今日はもはや、全體としてはブルジ・アジーとの間に、何らの根本的な對立をもしてをらぬ。それと同時に、これらの謂ゆる殘存勢力が、ブルジ・アの政治勢力に對立して現はれてゐた貴族院、樞密院のようは諸制度は、その外形にはほとんど何らの變更をも加へられないで、そのまゝブルジ・ア政治機構の一部を構成する要素に變じてゐる。これは最も重要な專制主義の遺制と認められてゐる×××そのものについても、同樣である。かように反動的・帝國主義的ブルジ・アの政治勢力は、舊勢力と舊制度との急速な同化によつて、急速に結成しつゝある。

第二には、地主階級の上に、ブルジ・アジーの政治勢力が急速に增大し、地主階級は、今や完全にブルジ・アジーに隷屬するにいたつたことである。これは主として、三つの根據にもとづいてゐる。

即ち第一には（一）資本主義の急速な發展の結果として、わが國の經濟のうちに、農業がその重要さとその獨立性とを急速に失つたこと、それはいよ〳〵ます〳〵商工業に依屬し、金融資本に隷屬するにいたつたことである。第二には（二）地主は土地の所有者としては小作料の收得者であると同時に商業上、工業上、金融上の資本家たる性質を、急速に增加したことである。小作料の收得者としては彼らは封建的な搾取形態の保持者であり、封建的な收入の源泉によつて活きてゐる。彼らの下半身は依然として、封建色に染まつてゐる。けれども彼らの上半身は、いよ〳〵ます〳〵ブルジ・アジーの黃金色をもつて輝やいてきた。彼らは本來の地主の階級としても、ブルジ・ア政治勢力に對立する專制主義の物質的根據となるには、すでに餘りに薄弱である。しかるに彼らの少なくとも半身は、すでにブルジ・ア化してゐる。地主階級には、もはやブルジ・アジーに對抗する獨立の政治勢力として存在する基礎がない。近年、地主黨の樹立が提唱され、種々なる形でその試みが行はれたにも拘はらず、今日にいたるまで、これらの計劃がほとんど何らの發展を見ないのは、主としてこの事實にもとづいてゐる。もしわが國の今後に、地主黨が組織せられるにしても、それはブルジ・アジーに對抗するためではなくて、たゞこれと有利に取引するためである。それはブルジ・アジーの政治勢力に對立する獨立の政治勢力をなすものでなくて、むしろその同盟軍としてゞあり、或はその一分派としてゞある。

地主階級をして、ブルジ・アジーの政治勢力に完全に隷屬し、もしくはそのうちに融合するにいたらせたいま一つの有力な理由は、(三)農村における階級對立の、急速な增大にほかならぬ。農民の貧窮化と、小作農民の半農奴的・半プロレタリア的性質とにもとづく階級對立の深刻化は、農村全體をもつてブルジ・アジーに對抗することを、もはや望みのないことゝしたばかりでなく、地主階級はその自衛のために、ブルジ・アジーと同盟することが、焦眉の必要となつた。

地主はすでに資本家に變質した範圍においては、完全に、ブルジ・ア政治勢力の一要素をなすものである。けれども本來の土地所有者としては、その經濟上の利害は、都市ブルジ・アと精密には一致せぬ。けれども地主の特殊な經濟上の利害は、政治上においては、彼らを帝國主義ブルジ・アの少なくとも同盟者たらしめることを妨げない。しかるに地主の資本家的變質は、兩者の結合を、單なる同盟以上の緊密な結合たらしめる。帝國主義ブルジ・アと地主との同盟は、政治上においては、反動的・帝國主義的ブルジ・アの政治勢力への完全な隷屬と融合、經濟上においては「農村振興」と名づけるところの、地主に對する若干の經濟上の讓歩となつて現はれてゐる。

かつては、政友會は地主黨であつて、憲政會は都市商工階級の政黨と見做されてゐた。少なくともこの二つの政黨は、或る程度までかような傾向を持つてゐた。しかるに今日は、この分類は、全くそ

の意義を失つてゐる。(註四)現に政友會のうちの最も保守的な部分がそれから分離して、憲政會と共に民政黨を組織することが、少しも不思議とされなかつたことが、これを證據立てゝゐる。これは今日ブルジ・ア政黨の分野を決定するものは、もはや地主の政治勢力ではなくて、寧ろ獨占的金融資本の內部における對立分派だといふことを物語る。

反動的・帝國主義的政治勢力は、ブルジ・アジーと地主との完全な結合によつて、急速にして大規模な結成の作用を進めてゐる。

(註四) ヴァルガは『日本資本主義の特質とその政策』(『インタナシ・ナル』十一月號譯載)と題する論文のうちに『產業ブルジ・アジーの黨、憲政會』『大地主黨、政友會』と云つてゐる。これはわが國の形勢が、いかに不滿足に海外に報導せられてゐるかを知るに足る一例である。

第三には、この作用の進行は、小ブルジ・アジー上層の政治勢力が、急速にその獨立と重要とを失ひ、いよ〳〵ます〳〵大ブルジ・アの政治勢力に隷屬し、もしくはそのうちに融解し去つてゐる事實に現はれてゐる。ブルジ・アジーの政權がまだ完全には確立されず、それは多かれ少なかれ、專制主義の殘存勢力と對立してゐた間は、小ブルジ・ア上層は、この殘存勢力に對する急進的の勢力としてブルジ・アジーの先鋒たる役割を演じてゐた。しかるにブルジ・アジーの政治勢力が、これらの殘存

勢力を同化し終るに從つて、小ブルジ・ア上層の急進主義的性質は中和され、反動的・帝國主義的ブルジ・アジーの勢力のうちに、急速に同化されてゐる。國民黨が漸次に凋落し、その後身たる革新倶樂部が政友會のうちに解消し去つたあとには、僅かにその一小碎片が、革新黨（宗派的分裂主義者が專制主義に對するマルクス主義的闘爭の同盟軍として選拔した、このたのもしい革新黨！）として無力な惰性的の存在を保つてゐるに過ぎないことが、この作用の進行を物語つてゐる。

第四には、ブルジョアジーが全く新しい領域に、積極的に支配の基礎を擴大し、より廣大な社會的根底の上に帝國主義的政治勢力を結成する作用としての、普通選擧の實施を擧げなければならぬ。

普通選擧の實施には、もとより、いろ〳〵の政治的意味が含まれてゐる。それは謂ゆる專制的殘存勢力に對する、ブルジ・アジーの決定的の勝利を意味してゐる。それはブルジョアジーの成熟と、その政權の完全な確立とを意味してゐる。それはまた、ブルジ・ア分派間の政權爭奪によつて促進せられた——即ち、在野黨が政權獲得のために、從來の政黨地盤よりも、より廣い社會層の勢力に訴へる必要によつて促進せられた——といふ範圍では、これらの社會層に對する讓歩を意味してゐる。けれども、普選實施の直接の動機が何であつたにせよ、それは今日、ブルジ・アジーに取つては、これまで政治勢力の圏外に遮斷せられてゐた全く新しい社會層——勞働者と、農民と、小ブルジ・ア下層とを含

むこの廣大な社會層——にまで、その政治的影響力を擴大し、これをブルジ・アジーの指導の下に、強大な反動的・帝國主義的勢力に結成する機會として意識せられてゐる。かように一方においては、無產階級の政治的擡頭を意味する選擧權の擴張は、他方においては、反動的・帝國主義的政治勢力の結成が急速に進行する有力な作用の一つとなつてゐる。

反動的ブルジ・アジーの政治勢力は、同化し得べき一切の勢力を同化し、同盟を結び得べき有らゆる要素と同盟し、その政治的影響の下に獲得し得べきすべての分子を獲得しようとしてゐるばかりでなく、種々なる經濟上の讓歩ないしは欺瞞の政策によつて、出來得るかぎり反對勢力を中和することに努めてゐる。社會政策的な裝ひをした一切の政策と施設、勞働官僚に對する誘惑と無產階級運動に對する分裂政策とは、その現はれにほかならぬ。

かように、わが國におけるブルジ・アジーの政治的發展の現在の段階は、一般的には、明治維新によつて開始せられた封建的勢力からブルジ・アジーへの政權の推移を完了し、ブルジ・アジーの政治的支配を確立するにいたつたことである。そして現在の政治的形勢の最も著るしい特質は、かつては多かれ少かれ對立してゐたところの反動的な性質を帶びた諸要素が、獨占的金融資本の勢力を中心として、強大な反動的・帝國主義的政治勢力にまで、急速に結成しつゝあることである。

このブルジ・アジーの政治勢力と正面直接に對峙するものは、たゞプロレタリアと、その同盟者としての農民の政治勢力である。ブルジ・アジーの根本戰略は、その政治的影響力を最大限度に擴大し、廣大な小ブルジ・ア下層（さらに進んでは、先頭部隊から離れて居り、無產階級的指導から斷ち切られてゐるところの、意識のおくれた勞働者と農民との大衆をも、或る程度まで）獲得することによつて（普選はその重要な手段となる）、プロレタリアとその同盟者としての農民とを、完全に孤立せしめることである。さらに勞働者と農民との陣營內では、その戰線を分割することによつて、左翼的分子を完全に孤立させ、その影響力を、最小限度に局限することである（無產者運動內の分裂主義は、右翼的性質であると極左的性質であるとを問はず、その效果においては、均しくこのブルジ・アジーの根本戰略に策應するものである）。

（四）プロレタリアの一般戰略と無產政黨の性質及び任務

ブルジ・アジーの政權がなほ確立せず、ブルジ・アジーがなほ專制主義と對立してゐる狀態の下においては、プロレタリアの當面の任務は、なほそのうちに××的作用を殘こしてゐるブルジ・アジー——少なくとも急進的な小ブルジ・ア——と共同戰線に立ち、そのブルジ・ア民主主義の鬪爭を支持し、その政權の確立を促進することにあつた。

しかるにブルジ・アジーが完全に政權を確立した狀態の下においては、プロレタリアとその前衛の任務は、一般的には、ブルジ・アジーが未完成のうちに遺棄するブルジ・ア民主々義の要求を取り上げて、これを反動化してゆくブルジ・アジーの政治的支配に對するプロレタリアとその他の一切の被抑壓民の民主々義的要求に變じ、この鬪爭の展開によつて、それに續づいて展開される決定的な鬪爭における決定的の勝利によつて資本主義から新しい社會秩序に推移する根本條件を確立することである。

しかるに具體的には、この任務はわが國における今日の段階——その特質は、決定的に優越の地位に上ほつた獨占的金融資本の指導の下に、全ブルジ・ア的要素が强大な反動的・帝國主義的政治勢力に結成する作用が、いままのあたりに急速に進行してゐることにある、そしてこの反動的・帝國主義的ブルジ・アジーの根本戰略は、×××プロレタリアとその同盟者とを完全に孤立せしめることにある——においては、ブルジ・ア政治勢力のかような發展段階に對應して、强大な反對勢力の結成によつて、積極的にこの作用を妨げることに存してゐる。

それ故に、わが國におけるプロレタリア前衛の根本戰略は、一般的にはその鬪爭の對象を、明確に

反動的・帝國主義的ブルジ■ア■ジーの支配におくことである。

具體的には、反動的・帝國主義ブルジ■ア■ジーの支配に對して、いやしくも反對勢力としての作用を存してゐる一切の階級と社會層とを動員して、强大な反ブルジ■ア戰線を形成し、有力な反ブルジ■アの政治勢力を結成することにある。

ブルジ■ア政治權力と徹底的に闘ひぬくことのできる勢力は、プロレタリアである。それ故に、この反ブルジ■ア政治勢力のうちで、指導的役割を負はしめられるのは、プロレタリアであつて、その同盟者は、貧農――主として半プロレタリアたる小作農民（その最上層は、勞働の搾取を基礎とする農業者にまで、すでに變質しつゝある）――である。

小ブルジ■ア下層（このうちには小自作農その他の、勞働者を除く勤勞大衆を含んでゐる）は、決して社會主義的勢力ではない。それ故に、現在の瞬間をブルジ■ア■ジーの資本主義と×××プロレタリアの社會主義との、直接な決定的な闘爭の瞬間であると假定したならば、プロレタリアはその勢力のうちに、小ブルジ■ア下層を計上することはできぬ。小ブルジ■ア下層が、プロレタリアの社會主義を支持するにいたるまでには、プロレタリアはまづ彼らを共同の闘爭に動員し、その指導の正しいことを實證しなければならぬ。この共同の闘爭とその發展とによつてのみ、この社會層はブルジ■ア

とプロレタリアとの決定的な闘爭の瞬間にあたつて、或はその反社會主義的性質を中和されて中立し、或はプロレタリアの社會主義を支持する力となる（これを決定するものは、この社會層との共同の闘爭によつて展開せられる形勢の如何と、プロレタリア前衛の戰術の如何である）。

けれども小ブルジ■ア下層は、反動的・帝國主義的ブルジ■ア■ジーと對立する時には、なほ反對勢力たる作用を殘してゐる。從つて今日の段階においては――卽ち、プロレタリアの社會主義がブルジ■ア■ジーの資本主義と正面から衝突し闘爭してゐるのではなくて、すべての被支配・被抑壓社會層と反動的・帝國主義的ブルジ■ア■ジーの支配とが直接にあい對立してゐる現在の段階においては――それは尙ほ活動してゐるところの反ブルジ■ア的現動勢力として、この共同戰線の一要素となることができる。それ故にプロレタリアは、この社會層を自分の側に計上しなければならぬ。

のみならず、プロレタリアを孤立せしめるブルジ■アの一般戰略は、主として、この小ブルジ■ア下層を獲得することに成功する程度によつて、その成功の程度が決定される。それと同時に、小ブルジ■ア下層を失ふことは、ブルジ■ア■ジーにとつては、その孤立を意味してゐる。それ故に、この社會層は、二つの對立した勢力の爭奪戰の對象となる。

勞働者と半プロレタリアたる農民との、意識のおくれた層もまた、この社會層と極めて似寄つた立

場におかれてゐる。彼らは、思想的には、なほ小ブルジョアジー下層と甚しく異るところがない。ブルジョアジーの影響力は、この層を目がけて突進する。これらの要素を失ふことは、プロレタリアに取つては、その主力と同盟との、重要な一角を切り崩づされることを意味してゐる。しかるに前衛的な分子と一般勞農大衆との間に、緊密な結合のない現在の陣形は、勢ひこの危險にさらされてゐるものである。

現在の段階におけるプロレタリア前衛の具體的な任務は、これらの一切の要素を、反動的・帝國主義的政治勢力に對する反對勢力として（それは純然たる、×××プロレタリアの社會主義的勢力としてゞはなく）、反ブルジョア政治勢力に結成することにある。それ故に、プロレタリアとその前衛の歴史的任務の立場から見た無產階級の大衆的な政黨は、いまやその政治的支配を確立し、そして帝國主義的進出のために、强大な反動的政治勢力にまで結成を急いでゐるブルジョアジーの支配に對する闘爭といふ一定の限られた闘爭目標の下に、あらゆる反對勢力と反對要素とを結合した反ブルジョア共同戰線の特殊な一形態なのである。かような意味において、プロレタリアの歴史的任務の上から見た無產政黨は、共同戰線の黨である。

反動的・帝國主義ブルジョアジーの政治的支配に對抗して、あらゆる反對勢力を動員し結合した闘爭（この闘爭は勢ひ社會主義の闘爭ではなくて、民主主義（註五）獲得の闘爭である）は、×××プロレタリアの歴史的任務に欠くべからざる必然の段階であり、×××プロレタリアの歴史的任務そのものであるといふ意味において、この共同戰線黨は、無產階級的の黨である。

（註五）言葉をかへて言へば、ブルジョアジーの反動的な支配に對する政治的自由獲得の闘爭である。私がこゝに特に『民主主義（デモクラシー）』といふ言葉を用ひたのは、かの宗派的分裂主義者が、吾々の現在の政治的闘爭を『絶對專制主義』に對する『ブルジョア民主主義獲得』の運動であると規定する見解との、鋭い對立を表はさんがためである。彼らはわが國現在の政治的支配を、『絶對專制主義』の支配であると考へる。『絶對專制主義』と直接正面から對立した階級は、歴史的には、ブルジョアジーであつて、その政治闘爭は、ブルジョア民主主義獲得の闘爭である（それ故にこそ、革新黨は、少なくとも勞働者と農民の黨たる社會民衆黨と日本農民黨とにまさる彼らの友人なのである！）。これに反して、吾々は、現在の日本を反動的帝國主義的ブルジョアジーの支配と考へるから、吾々の闘爭は、この帝國主義的ブルジョアジーの政權に對して、勞働者と、農民と、その他の一切の勤勞民、被抑壓民とが、民主主義を要求する闘爭なのである。

けれども、この共同戰線黨が無產階級黨であるといふ意味は、無產政黨樹立運動の當初から、私がしば〳〵操り返したように、たとへば『共產黨が無產階級黨であるといふのと同じ意味で、無產階級黨なのではない』。なぜならば、この共同戰線黨の任務は、著るしく限定せられてゐるからである。そ

れは×××プロレタリアの歴史的任務のうちの、一つの段階であるにはちがひない。また極めて重要な——致命的に重要な——段階なのである。けれども一つの重要な段階を占めるといふことは、プロレタリアの歴史的任務のうちに、限定せられた任務をもつといふことを意味してゐる。從つてこの共同戦線黨を主體として行はれる政治闘爭は、さらに次の闘爭段階にまで發展するものであり、發展せしめねばならぬもの——わが國においては、この發展の速度は、必然に急速に行はれるものと思はれる——ではあるが、なほかつ限度がある。共同戦線黨を主體とする政治闘爭の展開は、プロレタリア×××樹立ではなくて、勞働者と農民と小ブルジ・ア下層の利害を代表する×××實現をもつて、その最大の限度とするものである。

無產政黨が共同戦線黨であるといふことは、これを構成する內容が、必然に、必ずしも純一でないことを意味してゐる。共同戦線の特質は、必ずしも、最終目標の精密な一致、または根本原則の完全な一致を條件とするものではなくて、或る限定せられた闘爭目的の一致を條件とすることにある。共同戦線といふ言葉の本來の意味は、獨立した團體と團體との間の、かような一定期間の共同動作を指すものであつて、無產政黨を共同戦線黨といふ場合には、精密な意味では、それとは違つてゐる。けれどもなほ且つ無產政黨は、反動的・帝國主義的政治勢力との闘爭といふ、限定せられた目標のもとに、最終目的と根本原理とを異にする要素をも、一つの反ブルジ・ア的政治勢力に結合するといふ意味で、共同戦線の特殊な一形態だといふことができる。

したがつてそのうちには、×××プロレタリアの社會主義的要素がある。また搾取者たる地主に對する經濟上の關係においては、半プロレタリアであるが、なほかつ封建的な生產形態の上に立つ小作農民がある。代表的な小ブルジ・ア下層の標本たる小自作農があり、その他の小ブルジ・ア下層に屬する要素がある。共同戦線の一形態としての無產政黨は、これらの異つた諸要素を、反動的・帝國主義的政治勢力に對抗して、たゞ一つの單一な、强大な、政治勢力に結成することを任務とする。これがプロレタリアの歴史的任務のうちに割當てられたところの、無產政黨の限定せられた任務である。

長崎を志すAと、大阪を志すBとが、大阪への到着を限定せられた共通の目標として、共同戦線を形成したと假定したなら、どうだらう。大阪驛への安着は、Bの旅行の動機を消却してしまうに違ひない（實際の形勢はBをして、尙ほその上の旅行を續づけしめる場合もあるが）。ちようどその通りに、共同戦線黨としての無產政黨は、この共通の闘爭目標の實現と共に、少なくともその構成要素の或るものは、そのうちに保つてゐた×××性質、ないしは×××作用を發展せしめ終るにちがひない。

これと同じく、無產政黨が現實に、反動的・帝國主義的政治勢力に對する共通の闘爭——民主々義

獲得の闘爭――を、限定せられた目標として、一切の反對要素を結合した反ブルジ・ア黨であるとしたならば、そしてこの反ブルジ・ア共同戰線の一要素であり、かつその指導的役割を負はしめられてゐる×××プロレタリア――又はそのうちの極左的部分――が、その指導的な地位を濫用――若くは誤用――して、この共同戰線黨を、その本來の限度を越えた方向に指導したならば、どうだらう？

たとへばこの共同戰線黨を、前衛黨でゞもあるかの如く錯覺し、この錯覺にもとづいて指導したならば、どうだらう？（宗派的分裂主義者は、現にそうしてゐる！）たとへばこの無產政黨を、ブルジ・ア政治勢力に對する「單一」な共同戰線黨であるといふ明確な認識を失つて、反ブルジ・ア政治勢力中の最左翼黨として指導したなら、どうだらう？（宗派的分裂主義者は現にそうしてゐる！）これは明らかに、共同戰線黨としての任務の限界を越えしめようとするものであつて、その必然の結果は、さきの例證の場合と同じように、その構成要素の少なくとも一部分をして、そのうちに保つてゐた××作用を、早熟的に中和せしめてしまうことを意味してゐる。

これに反して吾々の無產政黨が、實際において、反ブルジ・ア共同戰線黨としての任務の限界を越え、たとへば準前衛黨として、ないしは最左翼黨として行動をつゞけることができたと假定したならば、それは畢竟、初から準前衛黨であり最左翼黨であつて、共同戰線黨たる實際の內容を備へてゐなかつたといふことに歸着する。言葉をかへて云へば、それは×××プロレタリアとその前衛との歷史的任務のうちに、極めて重大な一段階をなすところの政黨――反動的・帝國主義的政治勢力に對抗する一切の反對要素を、民主々義の闘爭に動員する政黨――たる實質を備へてゐなかつたところの、共同戰線黨たる實質を持たない政黨であつたといふことを意味するにすぎぬ。

かように共同戰線黨としての單一無產政黨は、×××プロレタリアの社會主義を闘爭目標とする黨ではない。それはまた、プロレタリア×××樹立によつて、新しい社會秩序への推移を始めることを、その綱領とする力ではない。

けれども無產政黨とその政治上の闘爭とは、×××プロレタリアの歷史的任務の遂行と、この決定的な政治闘爭への發展のうちに織り込まれたものとしてのみ、この闘爭の全發展の一つの段階をなすものとしてのみ、吾々はその重要性を理解することができる。

かゝるプロレタリアの政治的闘爭の、現在の發展段階をなすところの無產政黨の任務は、一般的には、反動的・帝國主義的なブルジ・アジーの政治支配に對する闘爭であつて、具體的には、一切の反ブルジ・ア的要素を、この闘爭に動員することである。卽ち、現在の資本主義社會のうちにあつて、いやしくも反動的・帝國主義的ブルジ・アジーの政治勢力に對して、反對勢力としての作用をもつてる

る一切の要素を結合して、單一にして強大な反ブルジョア的勢力に結成することである。それはたゞ反ブルジョア的作用として現に働らいてゐる要素ばかりでなく、ブルジョアジーに對する反對勢力としての作用を、潜在勢力としてゞも含んでゐる要素は、これを實際の闘爭に動員し、この潜在勢力を現動勢力に轉換しなければならぬ。無産政黨の任務は、現在の資本主義社會のうちに在る一切の反ブルジョア的勢力と反ブルジョア的作用とを、最も廣大な規模において結合し統一して、これを反動的・帝國主義的政治勢力に對立せしめることにある。

×××プロレタリアとその前衛とは、この闘爭のうちに、常に指導的な任務を負はなければならぬ。けれどもその指導は、かゝる歴史的意義をもつところの共同戦線黨の任務と、その闘爭の發展段階の意義とに對する明確な理解と、それが當然にもつところの限界に對する、明確な認識にもとづくものでなければならぬ。

また、この前衛分子の指導は、精神的な影響力であつて、斷じて機械的な支配であつてはならぬ。前衛分子の影響力は、この共同戦線黨のうちに或は多數派たり、或は少數派であるかも知れない。いな少數派たることが、現在においては、むしろ常態であるといつてよい。無産政黨は、前衛分子が確實に、その機械的な支配を維持することのでき得るような規模に制限しておくべきものではない。

これに反して前衛分子は、その正しい見解と正しい戦術とを大衆の前に絶えず實證し、大衆を自らの體驗によつて説得することにより、最も廣大な大衆を、その影響力の下に獲得しなければならぬ。かような意味において、前衛は、大衆との關係においてのみ、生長し成熟することができる。

これに反して、前衛分子が共同戦線黨の上に、必ず機械的な支配を維持しなければならぬとすればその結果は、吾々の共同戦線黨は、一切の反ブルジョア的要素を單一な政治戦線に結合する代りに、これらの反ブルジョア的勢力のうちの僅かに一少部分にすぎない「左翼分子」のみを結合して、これをその他の部分に對立せしめる作用をするものとなる。それは×××プロレタリアの歴史的任務が命ずるところの共同戦線黨ではなくて、極左主義、分裂主義、ないしは宗派主義が必要とするところの對立的な「左翼政黨」にほかならぬ。

×××プロレタリアとその前衛とは、この政治上の共同戦線の上に、有力な指導を確立しなければならぬ。けれども共同戦線黨の上に何らかの機械的な指導、ないしは機械的な支配を維持しようとする一切の試みは、共同戦線黨を左翼政黨、ないしは右翼政黨に變質し、なほその上に、大衆政黨を、政黨官僚の巣窟に變質する。この罪惡が、意識的右翼主義者によつてなされても、もしくは極左的宗派主義者によつて犯されても、均しく無産階級運動に對する罪惡である。共同戦線黨を準前衛黨ないし

は極左翼黨に變質せしめることは、これを右翼黨に變質せしめるのと同じように、それは反動的・帝國主義的勢力に對抗する單一な政治戰線に進出しようとする大衆を、抑制することにほかならぬ。

(五) 無產政黨の對立とその性質

反動的・帝國主義的ブルジ・アジーの政治支配に對抗する、單一な共同戰線としての無產政黨は、今日はなほ確立せられて居らぬ。それはなほ、形成の過程にある。それ故に今日、すでに單一共同戰線黨としての無產政黨が確立せられたかの如くに考へる見解は、自己欺瞞にほかならぬ。これに反して、無產政黨對立の現狀を見て、單一共同戰線黨がすでに空想に歸したと考へるのは（この見解は主としてブルジ・アと右翼指導者とが取つてゐる）皮相の見解にすぎぬ。この二つの見解は、正反對の方向に走つてゐるにもかゝはらず、反ブルジ・ア政治勢力の結成する作用を、たゞ數回の會議や委員會のうちにしか見出だすことができないといふ、共通の考へ方から出發してゐるものである。

今日、自ら無產政黨と呼び、また一般に無產政黨と云はれてゐるものには、四つの對立した全國的政黨がある。

これらの政黨の對立は、互いに兩立することのできない、相反した指導原理の對立にもとづくものだと主張せられてゐる。しかしながらこの對立は、當然にそのうちに具體化せられてゐなければならない筈の諸政黨の綱領の上には、充分に、明確に、現はされて居らぬ。

勞働農民黨

一、吾等は、我國の國情に即し、無產階級の政治的、經濟的、社會的、解放の實現を期す。

二、吾等は、合法的手段により、不公平なる土地、生產、分配に關する制度の改革を期す。

三、吾等は、特權階級のみの利害を代表する既成政黨を打破し、議會の徹底的改革を期す。

日本勞農黨

一、吾等は、我國の國情に即し、無產階級の政治的、經濟的、社會的、解放の實現を期す。

二、吾等は、合法的手段により不合理なる土地、生產、分配に關する制度の改革を期す。

三、吾等は、無產階級の利害を代表し、有產階級の壓斷する議會の徹底的改造を期す。

社會民衆黨

一、吾等は、勤勞階級本位の政治經濟制度を建設することをもつて、健全なる國民生活を樹立する所以と確信し、これが實行を期す。

二、吾等は、資本主義の生產並びに分配方法に、健全なる國民生活を阻碍するものありと認め、合法的手段によつてこれが改革を期す。

三、吾等は、特權階級を代表する既成政黨並びに社會進化の過程を無視する急進主義の政黨を排す。

以上三政黨の綱領を比較對照してみると、反動的・帝國主義的政治勢力に對する共同戰線のうちに兩立することのできない對立を見出だす代りに、むしろ著るしい類似を發見する。ことに勞働農民黨と日本勞農黨との綱領は、後者が第三項のうちに、「無產階級の利害を代表する」政黨であることを

特に明言してゐること以外には、全く同文であると云つてよい。

社會民衆黨の綱領は、この二つのものとは、稍々異つてゐる。即ち、第三項においては、勞農黨と日勞黨とが、ブルジ・ア議會の『改造』を主張してゐる代りに、社會民衆黨は、急進主義（或は極左主義！）を排してゐる。また第一項と第二項においても、さきの兩黨のそれとは異つてゐる。けれどもこの相異さへも、同一の意圖を、一そう婉曲に言ひ表はした程度の相異であるといふ、好意的な解釋を下すことの不可能なものではない（實際において、社會民衆黨の場合に、かゝる好意的な解釋を取るべきか否かは別問題であるとして）。

勞農、日勞兩黨が「無產階級」の政治的、經濟的、社會的解放を主張してゐるのに對して、社會民衆黨は「勤勞階級」を本位とする政治制度と經濟組織の建設を主張する。社會民衆黨が「無產階級」といふ言葉の代りに「勤勞階級」といふ文字を採用したことは、社會民衆黨を他の二政黨から區別する、本質的な相異であると見做されてゐる。即ち、この點において、社會民衆黨は、全く階級的立場を異にするものだと主張せられてゐるのである。けれども社會民衆黨が「無產階級」といふ言葉に代へて「勤勞階級」なる用語を選んだのは、いかなる意圖に出でたかを暫らく別問題とするならば――即ちこゝでも問題を、正式に文字に現はれた點だけに限るなら――この相異もまた、或る人々の誇張するが如き相異でないことは明らかである（註八）。

（註八）『勤勞階級』なる言葉は、勞働者――即ちプロレタリア――をも含めての、あらゆる種類の、勤勞によつて生活する社會層、即ち "Working Classes" の譯語と思はれる。現に『社會民衆黨宣言解說』のうちには『無產階級即ち勤勞階級、働かなければ食つてゆくことの出來ない勞働者、農民、俸給生活者、小商人、自由職業者其他有產階級とは全く反對の利害關係をもつてゐる階級――』と說明せられてゐる。もちろんこの說明の用語は、不正確を免れない。プロレタリア（無產階級）をその一部分とするところのトイリング・マス（勤勞大衆）が『無產階級即ち勤勞階級』でないことは言ふまでもない。またかような意味での『勤勞大衆』は、一つの階級とはいふことができぬ。かように『階級』ならびに『無產階級』といふ言葉は、少なくとも不嚴密に用ひられてゐる。

けれどもこの用語の不嚴密は、或る程度までは、一般の慣行となつてゐる。現に勞農、日勞兩黨が『無產階級の解放』を主張する場合にも、もしこの『無產階級』といふ言葉を嚴密な意味、即ち、嚴密にプロレタリアを意味するものと解釋するなら、兩黨の主張する『解放』からは、先づ第一に、農民が除外せられてゐることになる。しかるにこの言葉を好意的に解釋し、そのうちには貧農とその他の小ブルジョア最下層をも含んでゐるものと解釋するならば、內容においては、プロレタリアをも含めてのトイリング・マスと、少なくとも、著るしい差異のないものとなるのである。また勞農政黨が、慣例的に『無產政黨』と呼ばれてゐる場合にも、もちろん嚴密な意味でのプロレタリアの黨といふ意味ではない。

以上の比較によつて、吾々は次の如く結論しなければならぬ。即ち、これらの三つの無產政黨は、

そのおの〳〵が、黨の性質を、綱領の形式において正式に規定してゐる限りにおいては、その差異は或る人々の誇張するが如き差異ではない（つとめてこの差異を誇張してゐる者は、宗派的分裂主義者と、意識的右翼指導者である）ことに勞農、日勞兩黨の場合には、ほとんど何らの差異をも見出だすことができぬ。これに反して、これらの三黨の綱領面に正式に現はされてゐる差異を、可なり大きく計算して見ても、なほ且つその一方が、反動的・帝國主義的ブルジョアジーの政治的支配に對する反對勢力たる性質を現はしてゐるに反して、一方は、反ブルジョア的勢力たり得ない——或はファシスト的傾向を現はしてゐる——といふような差異ではない。この三つの無產政黨は、かりにその綱領の面に正式に掲げられてゐる見解に限定していふならば、少なくとも——その間の差異が大きいと假定しても、なほかつ、少なくとも——政治闘爭の現在の發展段階において、反動的・帝國主義的政治勢力に對抗する反ブルジョア的共同戰線の一要素となるためには、何らの差支へない差異なのである。いな反對に、×××プロレタリアの歴史的任務は、かゝる諸要素を強大な政治的統一戰線に結合し、そのうちに含まれてゐる反ブルジョア的作用を、剩ますところなく發展せしめることを要求してゐるのである。

以上は三政黨の比較を、かりにその綱領の上に正式に現はされてゐるところに限つたが、これは必ずしも、三政黨の性質の比較は、綱領の比較に盡きるといふ意味ではない。即ち三政黨の性質は、充分に綱領の上に現はされてゐるといふ意味ではない。また吾々が、三黨の綱領を比較してみたのは、これによつて三黨の相異（謂ゆる指導精神の相異）を過少に評價し、またはその相異を、皮相的に抹殺し去らんがためではない。しかしながら、これらの政黨の綱領が、ほとんど同文に近いものであつたり、又はその間に著るしい相異が具體的に現はれてゐない（即ちブルジョアジーの政治的支配に對する反對勢力として、單一な政治戰線を形成することを不可能ならしめる程度の、著しい相異が具體的に現はされてゐない）といふ事實は、次の事柄を證據だてゝゐるものである。即ち、これらの政黨の性質とその指導原理の相異と對立とは、或る指導者たちによつて、最大級の言葉をもつて意識的に誇張せられてゐるにもかゝはらず、この對立は（よしそれらの指導者たちの意識の上には存してゐるにもせよ）おの〳〵の黨の全性質の上に固定し、おの〳〵の黨の現實によつて定形づけられては居らぬといふことである。

この事實はまた、おの〳〵の黨の社會的階級的構成によつても、證據だてられてゐる。たとへば宗派的極左主義者の主張に從へば、勞働農民黨は「マルクス主義政治意識にまで昂揚せられた」ところの黨である。これに反して日本勞農黨は、かゝる意識にもとづく謂ゆる「全面的」政治闘爭に進出し

ようとする大衆を抑制して、これを組合主義政治運動に押込めるところの、組合主義黨なのである。しかるに社會民衆黨と日本農民黨とにいたつては、ファシズムの黨であり、少なくとも日々にファシスト黨へと轉落しつゝあるところの黨である。四つの無產政黨に對するこの宗派的極左的見解が正しいか否かは、暫らく別問題として、かりに今、これらの四つの政黨の指導者の意識は、まさにこの極左主義者の規定した通りであると假定したならば、どうだらう？　これは明らかに、著るしい相異と對立であるにちがひない。けれどもこの對立は、これらの四つの無產政黨の現實な構成要素の上に、果してどれだけの社會的階級的根據をもつて具體化せられてゐるだらうか？　これは極めて重大な問題であつて、しかも極めて明白な事實である。

まづ第一に、「マルクス主義政治意識にまで昂揚せられた」ところの黨――勞働農民黨はどうだらう？　その構成要素は、主として組合勞働者と組合農民である。しかもこれらの組合勞働者は、ほとんど日本勞働組合評議會と、それから組合運動の領域において評議會の影響力の下に立つところの、少數の組合とに屬する勞働者に限られてゐる。組合農民は、いふまでもなく、すべて日本農民組合に屬してゐる。組織せられた勞働者と農民以外には、若干の小ブルジ・ア下層分子と、インテリゲンチアとを含んでゐる。小ブルジ・ア下層の數が、どれだけの割合を占めてゐるかは明らかでないが、極めて僅少であることだけは慥かである（もちろん農民組合のうちには、多少の小自作農――小ブルジ・ア下層――をも含んでゐる）。

次に宗派的極左主義者によつて「組合主義政黨」と刻印された、日本勞農黨の構成要素をみると、まづ第一には、勞農總聯合に屬する組合勞働者と全日本農民組合に屬する組合農民とが、主たる要素をなしてゐる。組合勞働者と組合農民とのほかには、勞農黨の場合と同じく、若干の小ブルジ・ア下層とインテリゲンチアとを含んでゐるが、日勞黨の場合にも、小ブルジ・ア下層の割合は、恐らくは一そう僅かである。

ファシスト黨と規定せられた社會民衆黨はどうだらう？　こゝでも吾々は、その主要な構成要素が組織せられた工場勞働者（主として勞働總同盟所屬）であることを見る。ことに不思議なことは、このファシスト黨は、わが國のファシズムにとつて最も大切な社會的要素であるべき農村要素を、ほとんど持たないことである！　社會民衆黨もまた農民の獲得に努力し、ほとんど名目だけにすぎない農民總同盟を組織はしてゐるが、その實數は明らかでない。少なくともこのファシスト黨は、勞働農民黨のように、その構成要素のうちに、高率の農村要素を有しない。社會民衆黨は、小ブルジ・ア下層の獲得に特に注意を向けてゐるにも拘らず、その割合は、なほ極めて低いと見做されてゐる。社會民衆黨

の構成要素についての一つの特色は、小ブルジョアのやゝ上層に属する要素を含んでゐることである。しかしこれとても、專門技術家の團體たる工人會によつて支持せられてゐるといふことだけである。

かように宗派的分裂主義者の謂ふところのマルクス主義黨から、組合主義黨を經て、ファシスト黨にいたる三つの政黨の構成要素を點檢すると、組織せられたるプロレタリア、ないしは組織せられたプロレタリアと農民とが、壓倒的な多數を占めてゐるといふ一點において、共通の社會的構成を備へてゐる。（たゞ異るところは、プロレタリアに對する農民の割合が、マルクス主義黨(一)において最も高く、組合主義黨がこれに次ぎ、ファシスト黨において最も少ないことである！）。

さらにこれらの勞働者と農民とは、勞働者と農民との異つた層に屬してゐるかと云へば、必ずしもそうでない。即ちマルクス主義黨に屬する勞働者が、一般不熟練勞働者の層であつて、ファシスト黨の勞働者が、特權的な地位を占める熟練工、ないしは勞働貴族の層なのではない。もちろん、これらの勞働者と農民とは、多かれ少なかれ、意識の程度において相異のあることは爭はれぬ（これすらも眞實のランク・エンド・ファイルの間では、相異は極めて僅かである）。けれども、この意識の發達程度の相異は、社會層を異にするといふ根據にもとづくものではなくて、主として、過去における組合運動の訓練から生じた相異である。

以上の事實に謬りなしとしたならば、そして社會民衆黨が、工人會を含むといふ點と、農民の割合が他の二黨よりも遙かに少ないといふ點とを除いては、(一)この三つの無產政黨の構成要素――即ちその社會的階級的構成――は、ほゞ同一であると云はねばならぬ。

しかるにこれらの三政黨が、その構成を均しくするといふことは、その社會的階級的基礎を均しくするといふ一般的な意義以外に、さらに特殊な意味において、これらの三政黨が、或る共通の性質を持つことを物語るものである。即ち(二)これらの政黨は、その構成要素において、いづれもみな、ほとんど組合政黨の域を脫してゐないといふことである。たゞに組合以外の一般勞農大衆を、いくばくも現實にその黨員として有しないといふばかりでなく、黨の影響力の範圍も、組合の影響範圍以外には、幾らも伸びてゐないといふことである。

かくの如く、現在の無產諸政黨は、その「指導精神」が、口先き筆先きの理論の上で如何ようであらうとも、實際においては、組合運動の領域を複生したものから、幾ばくも進出してゐないばかりでなく、(三)これらの政黨の對立關係は、組合運動の領域における對立關係を、念入りにも、精密にそのまゝ複生してゐるものなのである。この二つの重要な性質において、現在における三政黨は、共通性質の政黨であると云はなければならぬ。

眞實のマルクス主義政治行動主義の政黨と、眞實の組合主義政黨と、眞實のファシスト黨――この三つの政黨は、おの〳〵その性質に照應したところの、社會的階級的構成を持たなければならぬ。それは均しく組織せられたプロレタリアと組織せられた農民といふ物質的基礎の胴體に、マルクス主義的文句や、ファシスト的タンカの雁首をすけたのでは充分でない。言ひかへれば、現在の三政黨が、マルクス主義黨と、組合政黨と、ファシスト黨として固定するためには、おの〳〵の黨は、その社會的階級的構成の上に、根本的な變形を遂げなければならぬ。勞働農民黨がマルクス主義政黨となるためには、組合運動の對立關係を複生した現在の構成の代りに、あらゆる組合のうちから（もちろん組合外のプロレタリア大衆のうちからも）マルクス主義的要素を集めた構成を持たなければならぬ。これに反して、農民を主たる構成要素とするところのマルクス主義黨（卽ち×××プロレタリアの前衛黨）なるものは、資本主義のいかなる特殊狀態の下においても、もとより想像することはできぬ。

その通りに、日本勞農黨が、かの宗派的分裂者のいふが如き組合主義黨となるためにも、その構成の上に、根本的な變形を經なければならぬ。組合鬪爭における相手方を異にし、從つてこの範圍においては、經濟上の利害が精密には一致せぬ（積極的に相反せぬまでも）ところの勞働組合と農民組合とを打つて一丸とした組合政黨なるものは、決して妥當な組織ではないからである。

社會民衆黨にいたつては、少なくとも現在の主たる構成要素たる組織せられたるプロレタリアを、農民――特に自作農――によつて代置し、さらにこれに相應した小ブルジョア層を獲得してこそ、初めて、僅かにファシスト黨に發達する基本的條件を備へることができる（註六）。

（註六）勞働農民黨が、三政黨のうちで、農民の黨たる性質を最も多く備へてゐることは、たゞに黨員の構成ばかりでなく、最近の府縣會選擧における實際の動員力によつても、疑問の餘地なく立證されてゐる。卽ち、農村における得票に對する工業都市の得票の割合は、社會民衆黨は三九％、日本勞農黨は二四％であつて、勞働農民黨は一五％である。絕對數からみれば、大阪以下十五の工業都市における社會民衆黨の得票は二萬八千餘票であつて、勞働農民黨のそれは一萬八千餘票である。そこで宗派的分裂主義者の見解に從へば、わが國の現在においては、ファシズムの社會階級的根據は、都市プロレタリアであつて、マルクス主義（卽ち社會主義）の社會階級的基礎は、農民だといふことになる！

かように勞農黨、日勞黨、社會民衆黨の對立を、マルクス主義、組合主義、ファシズムの三つの指導原理の對立であると假定したならば、この三つの指導原理は、三黨いづれの場合においても、綱領の上に正式に具體化せられてゐないばかりでなく、黨の社會的階級的構成の上に、なほこれに照應した根柢を有しない。それはせい〳〵、遊離浮動した思想、ないしは浮き上がつた「指導精神」として指導者の頭の中に存在するにすぎない段階にあるものである。

それ故に三政黨の間の「對立」は、今日はなほ固定され、定形づけられるに至つてゐないものである。

たゞ日本農民黨の場合には、以上の三政黨にくらべると、その相異と對立とが、はるかに固定し定形づけられてゐる。日本農民黨の反動的な性質は、たゞ單に、黨の社會的階級的構成といふ物質的な基礎から遊離した「指導精神」として存してゐるものではなくて、黨の構成要素の上に、具體的な根據をもつてゐる。即ち日本農民黨は、たま〳〵農民を主たる構成要素として成立つた黨ではなくて、それは原則的にプロレタリアから隔離した、農民のみの黨である。プロレタリアから原則的に隔離せられた農民は、プロレタリアと結合した農民とは、全く性質の異つた社會的勢力である。のみならず農民の封建的・小ブルジョア的なイデオロギーは、特にこれを強調して、その綱領の面に正式に具體化されてゐる。

かように日本農民黨の反動的な性質は、今日すでに、少なくとも外觀的には、この程度に固定化され、定形づけられてゐるかのようである。けれども、日本農民黨を構成する「農民」は、その他の無產政黨を構成する農民とは、異つた社會層に屬するかといへば、必らずしもそうではない。（註七）日本農民黨の構成要素は、さきに日本農民組合から分裂して日本農民組合同盟を組織した組合農民であつて、この範圍においては、日本農民黨に屬する農民の大衆は、社會階級的な根據から、その他の無產政黨の勞農大衆と共に、反ブルジョア的共同戰線に立つことが不可能なものではない。けれども日本農民黨が黨として、他の無產政黨と合同することは、その立黨の第一原則――プロレタリアから隔離した農民の黨――を放棄することを意味してゐる。それ故に、日本農民黨の一般大衆は、單一な共同戰線黨の一要素となるべき社會層であるにもかゝはらず、黨として、その他の三黨と合同の商議に入ることは、より困難であると見なければならぬ。（註八）

（註七、八）日本農民黨の構成要素は、自作農が大なる割合を占めてゐるといふ說がある。この點については、確かな數字がないから、疑ひを存しておく。ただし日本農民組合から分裂した直後の日本農民組合同盟は、だいたいにおいて、日本農民組合と同一の社會層から成立つてゐたものと見做してよい。もちろん、農民組合內に含んでゐる自作農の割合は、地方によつて異つてゐるが、右の分裂は、必ずしも、かゝる構成要素の相異にもとづいて行はれたものではない。

日本農民黨の指導者が、日本農民組合から分裂した動機は、勞農總同盟と共に右翼的政黨を組織する希望、ないしは諒解があつたことにあると傳へられてゐる。もしこれを事實とすれば、これらの要素が、プロレタリアと隔離した農民黨に結合したことは、むしろ成り行きに餘儀なくされた偶然であつて、當初の意識的な計畫に從へば、それは今日の社會民衆黨の一部分をなすべきものであつたといふことになる。日本農民組合から分裂したこれらの要素は、特殊な社會層に屬するものではなくて、日本農民組合內の、比較的意識のおくれた分子にほかな

らぬ。この要素が、プロレタリアのうちの比較的意識のおくれた部分と共に、改良主義的傾向の指導者の下に、右翼政黨を形造らんとしたことは、極めて自然なことである。かような見地から、今日の日本農民黨は、ファシスト黨と見るべきものではなくて、その構成要素の上からして、むしろ社會民衆黨と併はせて、一つの右翼的勢力を形勢してゐるものと見るべきものだ、といふ見解を抱いてゐる人がある。この見解には、たしかに適切な一面がある。こゝに附記して、讀者の參考に供しておく。

本論の執筆後に開かれた、日本農民黨の年次大會は『農民は農民黨へ』といふ原則の上に立ち、かつこれに適合した社會的構成内容を備へてをり、從つて黨の性質が最も固定してゐるかの如き外觀を呈してゐる日本農民黨が、却つて實際においては、最も不定動揺の狀態にあることを明らかにした。この一事は、無産政黨の現在の對立が、いかに固定し定形づけられたものでないかといふこと、またこの對立が、無産政黨樹立の過程における技術上の原因にもとづくことが、いかに大きいかといふことを物語つてゐる。

以上の考察は、次の如き結論に到達せしめるものである。即ち——

一、現在、對立してゐる無産諸政黨の構成要素は、だいたいにおいて、共同戰線黨としての單一無産政黨のうちに包容せらるべき社會的要素であつて、これらの社會層をほかにしては、現在の資本主義社會の内部には、反ブルジ■ア的勢力としての作用を有する、いかなる主要な社會勢力をも見出だすことはできぬ。それ故に、プロレタリアの一般戰略の上から見た階級的・大衆的共同戰線としての單一無産政黨は、かくの如き要素の包容によつてのみ、初めて形成せられるものである。それ故に、かゝる社會的要素の間に、いたづらに對立を呼び起こすことによつて、僅かに自己の存在を保つてゐるが如き政黨は(それが右翼的傾向を持つと、左翼的傾向を持つと、中間派的傾向を持つとに論なく)自ら單一無産政黨、共同戰線黨、等の名を僭稱しようとも、それは大衆が反動的・帝國主義的ブルジ■アジーの支配に對抗して强大な反對政治勢力に結成しようとする欲求を抑制し、この過程を事實上に阻害してゐるところの、宗派的朋黨にほかならぬ。

二、現在、これらの無産政黨の間に存する對立は(日本農民黨の場合を除いては)ほとんどまだ固定せられて居らぬ。かりに少數指導者の間においては、異つた指導理論が對立してゐると假定しても、これらの指導理論は、なほ社會的階級的基礎と結びついて居らぬ。これは現在の對立が、なほ定形のない、なほ極めて根柢の薄弱な程度にあることを意味してゐる。(註九)

三、プロレタリアの一般戰略の上から見た共同戰線黨としての無産政黨は、必然に、そのうちに意識の異つた發達段階を包容するものである。現在、無産諸黨派の間にある相異は(日本農民黨を除いては)、その綱領の上に正式に現はれたゐる範圍においては、單一共同戰線への合同を拒否する理由となり得ぬものである。(註一〇)

(註九) 現在の對立が、指導者の思想上の相異にもとづくことは無論である。けれどもその一半の理由は、無産政黨樹

立の論上における技術上の缺陷にあつたこと、この技術上の缺陷が、少なくとも現在の對立を不當に誇張したことは爭はれぬ。それは主として何にもとづいて居り、何人の責任であるかは別問題として、この事實もまた、現在の對立の根柢を一そう薄弱なものたらしめてゐる。

（註一〇）或る論者は、綱領の表面に拘泥するものとして笑ふかも知れぬ。けれども、その包袋に『正味一ポンド』と明記せられてゐる以上は、吾々はその實際の正味が九十匁しかないことを、むしろ當然として看過する前に、實際の正味が一ポンドあること、實際の正味を一ポンドに滿たすことを、要求すべきである。この意味においては、大衆はおの〳〵その政黨の綱領に『拘泥』して、分裂主義的指導者に向つて、その正味の充實を要求しなければならぬ。

これは現在、對立してゐる無產諸政黨の、單一共同戰線黨への合同の必要と、その可能とを立證するものにほかならぬ。（註一一）

（註一一）合同の可能とは、合同を不可能とする社會的條件がないといふこと、これに反して、それを可能とする社會的根據があるといふことを意味するものであつて、必ずしもこの合同の實現に、技術上の困難がないといふことを意味するものではない。それはまた、指導者の宗派的分裂主義（右翼的傾向たると左翼的傾向たるとを問はず）のために、社會的に可能であるところの合同が、實際には不可能となり得ることをも、豫想せぬものではない。かゝる場合には、宗派的・分裂主義的指導者を排除した大衆と大衆との直接の結合によつてのみ、反ブルジョア勢力の結成が行はれる。それ故に、一切の反ブルジョア要素が單一な反對政治勢力に結成する全過程のうちには、黨と黨との合同から、宗派的・分裂主義的指導者を排除した、大衆と大衆との直接の結合にいたるまでの、

あらゆる段階の手段を必要とすることは、云ふまでもない。これに反して、現在の對立狀態——對立がなほ固定し定形づけられて居らず、その根據のなほ薄弱な今日の段階に——おいて、ことさらに自己主張の目的から、對立政黨の指導者を排除してその大衆を獲得するといふ方法以外の結合——卽ち、黨と黨との合同——に絕對に反對することは、實際において、大衆の結合を無期限に延期しようとするものであつて、最も露骨な宗派心排他心の露呈にほかならぬ。かゝる指導者こそまつさきに、自らその地位を退讓して、大衆と大衆との直接の結合に道を開くべきである。『戰鬪的統一戰術』はかくの如く要求する！（『戰鬪的統一戰術』といふ言葉は、後節に言及するように、かの宗派的分裂主義者が、彼らもまた戰線の統一を求めてゐるかのような裝ひのもとに、實踐上の分裂主義を遂行するために鑄造したところの、贋造貨幣である）。

六、政治的統一戰線と左翼の任務

世界的の規模においても、資本主義がその一時的安定を固定せしめようとする渾身の努力と、そのために必要な、被抑壓階級の徹底的な克服を目的とする斷乎たる鬪爭の展開とを前にして、プロレタリアと一切の反ブルジョア的勢力の戰線を統一することは、經濟上の方面においても、政治上の方面においても、焦眉の急務となつてゐる。それ故に、今日は統一戰線に對する態度が、やがて無產者運動の陣營內において、左翼的傾向と右翼的傾向とを分かつ中心的な題目となつてゐる。

しかるに特別には、わが國における現在の形勢の特質は、統一戰線の實現を、一そう重要にして且つ差し迫つた必要たらしめてゐる。上向的な資本主義を背後に持ち、氣力のなほ旺盛なブルジ■ジー、獨占的金融資本の飛躍的な發展と帝國主義的進出、反動的帝國主義的政治勢力の急速な結成の進行と小ブルジ■ア層への急激な影響力の擴大、この强大なブルジ■アジーの勢力は、經濟上の方面でも政治上の方面でも、ほとんど何らの有力な抵抗に逢ふことなしに、思ひのまゝに、プロレタリアと農民とその他の被抑壓大衆との、搾取と隷屬との增大に向けられてゐる。この大規模に結成し擴大しゆくブルジ■アジーの勢力を前にして、勞働者と農民の政治上の戰線はいふまでもなく、經濟上の戰線といへども、なほ極めて薄弱である。すでに薄弱な組織の力は、なほその上に、全く聯絡を斷ち切られた——いな、しば〳〵相對立し抗爭するところの、並行線に分割せられてゐる。反動的・帝國主義的ブルジ■アジーの政治支配とその陰鬱な壓力とは、漠然ながらも、しかも一定の方向を指さすところの政治的不平となつて、强大な反ブルジ■ア的勢力に結成しようとし、もしくは結成を可能とする條件を作り出してゐる。しかるに反動的・帝國主義的勢力に對峙する單一な無產階級的な政治勢力に結成しようとし、その方向をさして動いてゐる大衆は、かへつて相對立し、互いに抗爭するところの、競爭政黨の埒內に押し込められ、このブルジ■アジーに對抗する勢力は、いたづらに分裂主義者の宗派心、ないしは政黨愛國心を滿足させ、彼らの地位を維持する手段に供せられてゐる。

かような缺陷ある陣形は、たゞブルジ■アジーに對する鬪爭の力を不當に減殺してゐるばかりでなく、×××プロレタリアとその前衛との影響力の範圍を局限し、さらに×××プロレタリアとその前衛そのものゝ、生長と成熟とをはゞんでゐる。

かくの如き形勢は、特にわが國において、ことに現在の瞬間において、戰線の統一をもつて、プロレタリアの最大の任務たらしめてゐる。

一般的には、右翼的傾向とは、勞働者と農民とその他の勤勞大衆との、局部的な利害のために、全階級的な利害を犧牲にしようとする傾向であつて、左翼的傾向とは、全階級的な利害のうちにおいてのみ、局部的な利害を見るところの傾向である。けれども具體的には、何が最も根本的な全階級的利害であるかは、階級鬪爭の發展の、おの〳〵の段階によつて決定される。現在の瞬間における、最も重大な全階級的利害の問題は、特にわが國においては、統一戰線の問題である。現在の段階におけるプロレタリアの歷史的任務は、一切の反ブルジ■ア勢力を剩ますところなく動員して、これを强大な政治勢力に結成することである。この鬪爭によつてのみ、×××プロレタリアの決定的な鬪爭と、進軍の道とが開かれるからである。

れ故に、わが國の現在においては、右翼的傾向とは、まづ第一に、最も重大な全階級的利害の問題であるところの、政治的統一戰線に對する態度によつて決定されなければならぬ。左翼が統一戰線の支持者であり、右翼が統一戰線の妨害者であるといふよりも、統一戰線を眞實に支持する者が（それ故に）左翼であり、統一戰線を妨害する者が（それ故に）右翼である。

左翼が統一戰線の支持者であつて、右翼がその妨害者であることは、今日、世界を通じての一般的な事實であることは、さきにも指摘した通りであつて、統一戰線の妨害者といふことが、現在に於ける右翼主義者の、國際的な定型であると云つてよい。

したがつて、わが國においても、右翼主義者と認められてゐる指導者が（彼らが若し、眞實に右翼主義者であるならば）勢ひ統一戰線の反對者であり、もしくは統一戰線にサボタージュする者であつても、それは少しも怪しむに足りないことである。左翼主義者の任務は、最も有効に、この右翼的傾向にうち勝つことである。

これに反して、もし自ら左翼と稱し、また左翼と認められてゐる陣營のうちに、統一戰線に對する反對の傾向があつたとしたらば、これは少なくとも、現在、國際的な規模において「左翼」と認められてゐる類型とは、全く相反したところの、左翼の一新タイプであると云はなければならぬ。

しかるにわが國における小兒病的極左主義者（これらの小兒病的極左主義者の「前衛隊」が、宗派的分裂主義者と名づけられる一群である！）の一群は、無產政黨の合同に反對して、最も「執拗果敢な」鬪爭をつゞけてゐるのである。

たしかに、彼らは最近にいたつて、合同反對の主張を變更し、もしくは緩和し、或は粉飾した。最近にいたつて、彼らは「合同一般」（卽ち、一般的に合同といふこと）に反對するものでないことを陳辯し、この誤解（！）の釋明につとめてゐる。合同問題に對する、これらの宗派的分裂主義者の態度の變更は、彼らが唯一の日課としてゐる誤謬の「淸算」の一つとしての意義を持つばかりでなく、それは現實な形勢と、そのうちから急速に增大するところの、政治的統一戰線に對する大衆の熾烈な要求——反動的・帝國主義的ブルジョアの支配に對する强大な反對勢力にまで結成しようとする大衆の進出——を反映したものとして、極めて重大な意義がある。この大衆の要求と進出とは、もはや彼らの宗派主義の埒內には、抑止することができなくなつた。彼らは、無產政黨合同に對する態度の變更——少なくとも緩和——によつて、大衆は如何にその指導者を「蹴飛ばして」進出するか（これが彼らの愛用の言葉である！）を實證したものである。

しかしながら、その動機がいづれにあらうとも、吾々は、彼らの態度の變更、ないしは緩和を歡迎す

るものである。たゞ然しながらこの態度は、どのように變更されたであらうか？

第一には、『社會民衆黨の指導精神の排撃に重點をおく傾向を示した從來の統一戰術が、より精密に規定さるべきことを、我々に要求するもの〻如くである』といふ微かな疑ひの根據の上に、社會民衆黨に對す從來の徹底的排撃一點張りの政策を改めて、『上からの協同戰線』――即ち、彼らの目するファシスト的指導者への、上からの共同戰線の『持ち掛け』！――をも併用するといふことである。（『マルクス主義』十月號）。

第二には、『統一を極めて機械的に考へて（たしかに尊敬すべき自己批判である！　筆者）例へば勞農黨と日勞黨の場合に於ても、日勞黨大衆を直接直ちに勞農黨そのもの〻下に、ひたすら獲得し、或は奪還すべきものとなす見解を批判するの必要に今や迫られてゐること』（『マルクス主義』十月號）に、今頃はじめて氣がつきかけたかの如くであることである。

かような自己疑惑と不安と動搖とが、やがて『合同一般』に對しては決して反對するものではないといふ、誤解一掃の努力となつたもの〻如くである。

しかるに一方には、かゝる折角の疑ひは、次の如き別個の疑ひによつて、帳消しにせられてゐる。

――『我々は、今日、かゝる鬪爭を通じて、主として謂ゆる「中間派」大衆を我々の戰線に動員し、

（！）獲得する（！）ことに力を集中し來つた。そしてそれは、正しい戰術であつた。我々は今やこれにラスト・ヘビーをかけるべき時期に立つてゐるもの〻如くである』（『マルクス主義』十月號）

すべてのものが『如くである』如く、これらの分裂主義者も、大衆の熾烈な要求と統一戰線への進出の大勢とを前にしては、あわたゞしくもまた、逡巡動搖のほかなきもの〻如くである。

かくしてこゝに、わが分裂主義者の一群も、一と先づ一應、『合同一般』論者にまで急速に轉落したもの〻如くであるが、彼らは一方においては、合同『一般』に贊成はするが、あらゆる具體的な合同には反對することによつて、依然としてその宗派的分裂主義者としての本質を保存しようとしてゐるのである。彼らの無產諸政黨に對する政策は、黨と黨との合同から、分裂主義的指導者を排除しての大衆と大衆との直接の結合にいたるまでの、あらゆる程度と段階とを含んだ彈力性のある戰術ではなくて、依然として、『日勞黨大衆を直接直ちに勞農黨そのもの〻下に、ひたすら獲得し、或は奪還すべきものとなす』ところの謂ゆる『戰鬪的統一戰術』（！）にほかならぬ。たゞ彼らは（一）この戰術に『ラスト・ヘビー』を掛けようとする（あともう一と息だ！　それで日勞黨の大衆が『直接直ちに』獲得できる！）この硬直な、『指導者を蹴飛ばして』の大衆の結合一點張りの指金を、曲りくねつた有ゆる形の材木に當てがつてみることが、彼らの謂ゆる『屈伸性のある統一戰術』であつて、もし彼ら

の戰術が、何らかの「屈伸性」を立證したとするならば、それは謂ゆる「上からの共同戰線の持ちかけ」――指導者に對する共同戰線の持ちかけ――を、あわたゞしくも彼らの謂ゆる「ファシスト指導者」の上にまで、一と思ひにひき伸ばしたことである（これと反對に、吾々が社會民衆黨との共同戰線の必要と可能を主張し、社會民衆黨との合同の努力を必要とする論據は、その指導者をファシストとは見ないで、社會民衆黨を、いまだなほ固定して居らぬ改良主義的右翼的傾向の黨と見るところに存してゐる）。しかるに次の拔萃が示してゐるように、社會民衆黨は（そして日本勞農黨もまた）彼らの見解によれば、絕對に、勞働農民黨とは、一時的な共同戰線にすらも立ち得ぬものなのである。

「……ブルジョア民主々義獲得の當面の鬪爭目的の範圍に於て……日本勞農黨は、かくして社會民衆黨もまた、我々と協同戰線をしき得るとなす……戰術は、かくて完全に誤謬でなければならぬ。吾々が日勞黨を排擊しなければならないのは、彼等が組合主義の故に、當面の鬪爭目的をも戰ひ取るに由なき戰略戰術の持主だからである。たゞ吾々は、無產階級をしてかゝる指導精神より脫却せしめ、眞實に政治的に戰ひ得るために、彼等に執拗に、眞實の政治鬪爭への協同戰線をもちかけ、彼等の正體を曝露し、幹部と大衆との矛盾を、その分離にまで發展せしめなければならないのみ。勞農黨と日勞黨との合同（これが彼等の合同である！　筆者）は、けだしかゝる方向に求むべきのみ」（「マルクス主義」三月號）。

かように社會民衆黨の場合は云ふまでもなく、日勞黨に對する場合においても、共同戰線の持ちかけ（これが戰鬪的統一戰術の全內容である）は、或る限定せられた目的をもつ政治的鬪爭を有効に遂行するためではなくて、徹頭徹尾、相手方の「正體を曝露し」、その大衆を指導者から引き離して、「ひたすらに」「直接直ちに」この大衆を自分の黨に獲得するといふ、何ら「屈伸性」のない戰術なのである。彼らの「戰鬪的」統一戰術においては、もちろんこの共同戰線が、これによつて黨と黨との合同の可能を增し、合同の機運を促進するが如き性質を、いかなる場合にも持たないこと、また持つてはならぬことは、云ふまでもない。

「故に、日勞黨の指導理論に對しては、常に飽くまで之を排擊するとゝもに、その傘下の大衆を勞農黨に獲得しなければならぬ。故に具體的方策としては、勞農黨は常に政策協定を日勞黨に提議しなければならぬ。政策協定は、第一に社會民衆黨、日本農民黨排擊のための、共同委員會設置を提議すべきである……」（「マルクス主義」三月號所載、「無產階級政治運動最近の展開」についての彼らのテーゼと說められる論文）。

「無條件合同論は何故惡いか、我々の共同戰線とそれとの違ひは何處にあるか」「我々が日勞黨大衆と共同戰線を張るのは、日勞黨をつぶして大衆を我々の方へとる爲めだ……」（「農民運動」六月號、淺野晃氏）。

『われらは昨年十一月のかの光輝あるわが勞働農民黨第一回大會に於ける、次の決議を斷じて忘れるものではない。

一、勞働農民黨と日本勞農黨との合同に關しては、日本勞農黨現在の指導精神にして變更されざる限り、絶對に反對す。

一、社會民衆黨、日本農民黨の排擊に關し共同戰線を張るべく、日本勞農黨に對して共同委員會の設置を提議す。

わが黨は、わが黨の光輝ある指導精神に基き、あくまで日勞黨の指導精神を排擊する……』(昭和二年五月、いはゆる無條件合同論に對する勞農黨の聲明)。

以上の僅かな引用によつても明かなように、『協同戰線持ち掛け』の目的と、これに期待せられてゐる作用とは、何ら『屈伸性』の片影だもないものであつて、前後一貫して、徹頭徹尾、對立政黨の切り崩し、その大衆を『直接直ちに』『ひたすらに』自黨に獲得すること——これを一言にすれば、對立政黨を『つぶして大衆を我々の方へとる』こと——に終始してゐるのである。

そして分裂主義者の最近の態度の變更は、抽象的には、合同『一般』の承認による、大衆の要求と合同論へのよぎなき追隨であるにも拘らず、具體的には、行きがゝりの方向へ、もう一つ、絶望的な最後のラスト・ヘビーを掛けてみよう! といふことなのである。これは一般的には合同に反對せず、具體的には、あらゆる場合の合同に反對することを意味してゐる。それは大衆の動搖に威嚇されて、その宗派的分裂主義の醜骸を、『戰鬪的統一戰線』のヴェールで隱くそうとしたものにほかならぬ。

彼らは、『合同一般』にまで追隨して來たにもかゝはらず、事實上、依然として、一切の具體的な合同を極力阻止しようとしてゐるものだといふことは、無產政黨に對する彼らの規定そのものが、これを證據だてゝゐる。

かつては、彼らは大衆的な共同戰線黨としての無產政黨を、嚴密な意味での前衛黨と錯覺して居つた。この錯覺は、彼らが無產階級運動における前衛黨の特殊な任務とその性質とを、明確に理解するに至つてゐなかつたことに基づいゐる。それ故に、彼らは大衆黨としての無產政黨を、前衛黨であるかの如くに振る舞ふことにより(尙ほその上に、勞働組合をまでも、前衛的黨であるかの如くに振る舞ふことにより)、事實上の解黨派的誤謬に陷入つてゐた。彼らがかくの如き錯覺の下に行動し來たつたことは、最近にいたつて、彼らが繰り返へし繰り返へし、いまさらのように、大衆的無產政黨が前衛黨でないといふ訂正を試みる必要を感じたことによつて、遺憾なく告白せられてゐる。それ故に彼らは、今頃になつて、大衆黨としての無產政黨の性質と任務とは何であるかといふ問題を、あわた〻

しくも、再び檢討する必要に迫られたのであつた。

もつとも無產政黨を前衛黨視した彼らの誤謬は、最近にいたつて、公式的には、一應、淸算せられたかの如くである（ただ彼らの追隨者のランク・エンド・ファイルの間では、この見解がなほ今日も殘つてゐる。これらの追隨者は、その指導者の、いつもながらの、ポンプの筒先を轉換するような、機械的な方向轉換の過程に追隨することができないで、今もなほ、暗中模索をつゞけてゐる！）。けれども實際においては、この謬つた見解は、彼らによつて、完全には淸算せられてをらぬ。彼らの宗派主義は、必然に彼らをして、この謬見に執拗にしがみつかしめてゐる。彼らは無產政黨を、前衛黨そのものと認める見解から、前衛（または前衛を僭稱する宗派主義者の一群）が、機械的にこれを左右し得るところの黨といふ見解に移つたにすぎぬ。

「わが黨の指導精神は純一であり、それは日勞黨の指導精神に對する對立物である」。（『農民運動』六月號、淺野氏）

宗派主義の一領袖は、かう云つてゐる。彼らの見解による日勞黨の指導精神は、組合主義的政治行動であつて、これに對する對立物が、いはゆる「マルクス主義」政治行動であることは、云ふまでもない。そこで彼らの理解する勞働農民黨は、前衛黨ではないが、「マルクス主義政治行動意識にまで昇揚せられた」ところの黨なのである。なほその上に、マルクス主義政治行動の意識を、「純一な」指導精神として結合するところの黨なのである。

これに反して根本原理を異にする二つ以上の團體、または勢力が、かゝる相異があるにも拘らず、或る限られた範圍において、共通の鬪爭目的を持ち、從つて、同一の鬪爭力を形造ることのできる性質を備へてゐるために、この限界内において、單一な勢力に結合することを指して、共同戰線といふのである。それ故に、無產政黨が共同戰線の一形態である限りは、その根本指導原理が、必ず「純一」であるとは、規定することができぬ。若し幸ひにして、現に純一であるとしたならば、それは無產政黨の内部において、もろ〳〵の指導原理が互いに鬪爭し、實踐によつて、その優越を黨大衆の前に完全に實證した結果でなければならぬ。もちろん×××プロレタリアとその前衛は、この共同戰線黨のうちに、その指導を確立しなければならぬ。けれども、これは共同戰線黨の内部において、如何なる條件の下においても、×××プロレタリアとその前衛をもつて自ら任ずる要素が、必ず勝利を得るといふ宿命を保證するものではない。もしこの『前衛』(?) に前衛たる性質がなく、その正しい指導精神を實證する代りに、誤謬とその淸算——なほその上に、欺瞞的な淸算——ばかりを日課としてゐるならば、最惡の右翼的指導精神が、却つて勝利を得るかも知れぬ（それ故にこの種のタイプの

「前衛」(!) は、勢ひ共同戰線黨の內部において、異つた指導精神と對立することを、極度に恐怖する!)。

しかるに宗派主義者の規定するところの勞働農民黨は、かくの如き性質をもつた共同戰線黨ではなくて、「マルクス主義政治行動意識にまで昂揚せられた」黨であり、マルクス主義政治行動意識を「純一」な指導精神として、その他の一切の要素を絕對に排除するころの黨なのである。この黨は——宗派主義者の公式に從へば——決して前衛黨ではない! しかしながら前衛黨以外の何ものであり得ようか? 吾々は最も嚴密な意味での、×××プロレタリアの前衛黨以外には、マルクス主義政治行動意識を「純一」な指導精神とする、如何なる黨の存在をも認めることはできぬ。それはまた、事實において存在したこともなく、現に、どこにも存在せぬ。これに反してわが宗派主義者が、前衛黨以外に、マルクス主義的政治行動意識を「純一」な指導精神とする黨派が、そこらあたりに幾つも轉ろけてゐるかの如く考へること——この根本的な謬見——こそ、彼らをして、かつては無產政黨と前衛黨とを穿き違へさせた誤謬の根柢であり、また彼らをして、左翼無產政黨や左翼組合をもつて、前衛黨に代用しようとし、また代用し得るかの如く考へる解黨派的誤謬に陷入らしめた根源である。それは無產階級運動における前衛黨の特殊な、そして比類のない性質と任務とを、全く理解してゐないことを證據だてゝゐるものである。

宗派的分裂主義者のいふように、勞働農民黨は、決して前衛黨ではない、しかしながら、斷じてマルクス主義政治行動意識を「純一」な指導精神とするところの黨(即ち事實上の前衛黨!)であるとしたならば、その他の無產政黨に對しては、その大衆を奪ひ取るといふこと以外には、何らの統一戰術もあり得ない。そしてこの「戰鬪的」統一戰術は、たゞ右の範圍內において「屈伸性」を持ち得るのみである。黨と黨との合同は、もとより絕對に問題とはなり得ない。たゞ對立政黨の指導者らが、眞實のマルクス主義政治行動意識にまで完全に改心して來た場合にのみ、初めて合同が問題となる。從つて「日本勞農黨の現在の指導精神にして變更せられざる限り」、如何なる合同にも「絕對に反對す」といふ結論は、勞働農民黨を、宗派的分裂主義者の規定するが如き黨派(即ち前衛黨)と規定したときにのみ、初めて完全に正しい結論となるのである。

それ故にわが宗派主義者が、勞働農民黨を(眞實に共同戰線黨と規定する代りに)、かくの如く規定することは、事實上、あらゆる合同の可能を根本的に、無條件的に、拒否してゐることを意味してゐる。それは合同「一般」への賛成であつて、同時に、合同「全般」の拒否にほかならぬ。

では彼ら宗派主義者は、何故に合同を忌み嫌ふであらうか? (かの「無條件合同論」なるものが、

たま〳〵新聞の一隅に現はれた時、彼らがいかに、焦燥狀態に陷入つたかを想起せよ！）

「彼等（無條件合同論者）は無條件合同によつて、勞農黨の政治的協同戰線の闘爭を、日勞黨の組合主義的政治闘爭にまで、引き下げやうと試みてゐるのである（『マルクス主義』十月號）。

こゝに勞農黨と日勞黨との「無條件合同」といふものが、如何なる種類の合同であるかは、明らかでない。今日、兩黨の合同が、何らの合同條件を討議することなしに行はれ得るものであるかどうかは、しばらく問題外とする。たゞ「無條件」の合同といふからには、いかなる合同條件もない合同であつて、從つて、少なくとも勞農黨側からの、指導者を蹴飛ばして來いといふ條件も、日勞黨側からの、極左小兒病を治療して來いといふ條件も、そのいづれをも含んで居らぬ合同と解しておく（註二二）。

（註二二）最近、宗派的分裂主義者は、大衆の前に、その分裂主義的品質をおし隠すために、「職闘的統一戰術」といふ新包裝を發明すると同時に、合同「一般」には反對せぬが「無條件」合同には絶對に反對するといふ口實の下に、合同論への他日の憎惡よき追隨と合流との血路を、用意しつゝあるものゝ如くである。

日勞黨分子が勞農黨から分離した瞬間にあつては、第三回中央委員會以前の狀態に復歸する（即ち、原則として左翼團體に門戸を開放すること）意味で、無條件的に合同することが問題となり得たのであるが、兩黨が別個の黨として一ケ年間の對立的な生長をして來た今日は、何らの合同條件をも討議することなしに合同することはもとより問題となり得ない。勞農日勞兩黨の場合は、綱領がほとんど同文だから、この點はよいとしても、組織や諸機關などは、異つた發達を遂げてゐる。從つて、兩黨の一方が崩壞して他方に併合せられるのでなくて、兩黨が同等の立場に立つて合同する場合には、如何なる新規約の下に合同するかゞ、何をおいても合同の基礎條件とならざるを得ぬ。それ故に、かゝる合同の條件をも含めた意味で、全く條件の無い合同なるものは、全く無意味であつて、今日、かゝる意味での無條件合同を主張してゐる者は、もとより何處にもない。それはたゞ、宗派的分裂主義者が、何らか爲めにする目的でこれを想定し、この假想敵に向つて藏砲してゐるにすぎぬ。何の爲めにする目的で？　恐らくは、究極において抑止することのできない大衆と吾々との合同論への、他日の憎惡よき追隨の血路を用意しておく爲めに！　彼らの宗派心と宗派的行動の常習とが、かく語つてゐる。けれども合同の商議は、無條件的に、即ち、合同商議の開催を妨げるような、何らの豫備的條件なくして開くことができる。この場合には、合同そのものに何らかの條件を附するか附しないかは、合同商議によつてのみ、初めて討議し決定せらるべきである。

宗派的分裂主義者は、合同論は日勞黨を救ふための策謀であるといふ宣傳により、黨大衆の敵黨愛國心を刺戟しつゝある。これは單なるデマゴギーと見るよりも、合同によつて當然に起るべき、對立指導者との直接の生存闘爭に對する、彼らの不安と恐怖とを反映したものと見なければならぬ。日勞黨が（或はその他の黨が）、これらの宗派主義者の一派以上に、救ひを必要とする狀態にあるか否かは私の知るところでない。けれども合同によつて利益を得るものは、吾々の見解によれば、右翼的影響力ではなくて、左翼的影響力である（であるからこそ、統一戰線に對する反對が、今日、右翼の國際的な定型なのである）。合同によつて何ものが利益を受けるかについて

の、宗派主義者と吾々との見解のかような正反對は、『左翼』に對する彼らと吾々との、評價の相異にもとづいてゐる。彼らの評價は、左翼に對する評價ではなくて、宗派に對する評價である。合同が、宗派主義の機械的支配の維持にとつて有利でないことだけは、疑ひの餘地がない。こゝに彼らが、黨大衆の政黨愛鬪心を侮蔑して、ことさらに對立を激成するデマゴギーの必要と、その宗派的根據がある。

そこで勞農日勞の兩黨が、双方共にそつくりそのまゝ、例へば分裂前の綱領政策の下に、合同したと假定する。もちろん、双方の現在の指導者も一緒になる。それは極左主義者の見解に從へば、一方はマルクス主義政治行動を代表し、一方は、組合主義政治行動を代表する。この二つの指導精神は、もはやこれまでのように、おの〳〵その黨員大衆を、敵の着彈距離の外にある安全な防壁の後ろにしまつておいて、指導者らが小手先きだけを出して爭ふのではなくて、双方の黨員大衆を一緒にしたものゝ上に、二つの指導精神が、充分にかつ直接に影響を持つて鬪爭することになる。この鬪爭の結果として（讀者諸君の誤讀のないことをお願ひする！）——然りこの鬪爭の結果として、わがマルクス主義指導精神が勝利を得るのではなくて、組合主義指導精神が美事に勝利を得る！　こうして勞農黨の現在の鬪爭は、いはゆる無條件合同のために、日勞黨の組合主義政治鬪爭にまで引き下げられる！　これがわが極左的・宗派的・分裂主義者の期待と自信である！

「……我國に於ては、右の共同戰線は、今やわが勞働農民黨として結成されつゝある。この共同戰線の先頭が都市プロレタリアートであり、その指導精神が左翼の指導精神でなければならないが故に、われらの勞働農民黨は、左翼的指導精神の下におかるゝものでなければならず、又そうでなければ共同戰線黨として發展することは出來ないのである。」（『農民運動』四月號、淺野晃氏）。

勞農黨は宗派的分裂主義の指導の下におかねばならぬ！　そうして同時に、共同戰線黨といふ保護色を保存しなければならぬ！　このヂレンマは、次の如くにして解決される。

（一）勞農黨は、左翼（宗派の誤植？）の指導精神の下におかれるものでなければならぬ。

（二）他黨との合同の結果は、左翼（？）指導精神以外の指導精神に勝利を占めさせる。

（三）それ故に、勞農黨を左翼（？）指導精神の下に『おかれるもの』として保存するためには、現在の分裂對立の狀態を、あらゆる代價を拂つても維持しなければならぬ。

これはたしかに、素晴らしい解答である！　けれども問題は、なほ完全には解決せられて居らぬ。大衆の政治戰線統一の要求は、その脚下から沸き返つてくる！　そこで、『戰鬪的統一戰術』へ！

かように『戰鬪的統一戰術』といふ新熟語は、勞農黨を彼らの宗派主義の支配の下に保存しておかうとする彼らの欲求と、政治戰線の統一に對する大衆の熾烈な要求との對立——宗派主義と大衆との

對立――この軋轢と摩擦をまやかすために注入せられた機械油であつて、「吾々の實踐上の分裂主義もやはり理論上は統一主義なのだ」といふ、申開きにほかならぬ。

こうして「合同一般」と「戰鬪的統一戰術」とは、反動的・帝國主義的政治勢力に對抗して、强大な單一政治戰線への結成に進出せんとする大衆を、宗派的指導の下に喰ひ止め、もしくは宗派的鬪爭と政黨愛國主義の抗爭とにそらせる重大な任務を持つてゐる。こゝに「合同一般」と「戰鬪的統一戰術」といふ呪文の、反動的な役割がある。

×××プロレタリアと結成せられたマルクス主義の意識とは、共同戰線黨としての大衆黨のうへにも、指導的な役割をもつてゐる。それは正しい戰略と正しい戰術とを、たえず大衆の前に實證することによつて、大衆黨のうへに、その指導を確立しなければならぬ。なぜならば、共同戰線黨としての無產政黨は、鬪爭の現在の發展段階において、反ブルジョア政治勢力たる作用を包藏する一切の要素を剩ますところなく動員し、それらの要素の含んでゐる反ブルジョア作用を、剩ますところなく發展せしめるべき任務をもつてゐる。然るにこれらの要素のことごとくが、必ずしもこの鬪爭の最後まで、かゝる作用を保つてゐるものではない。或る要素は、この鬪爭の僅かな進行のうちに、早くもその反ブルジョア的作用を中和し盡される。のみならずこの鬪爭は、さらにこの鬪爭の發展によつて、そのあとに續づいて展開する決定的な鬪爭の段階に連續するものであつて、現在の鬪爭はこの決定的な鬪爭との關係においてのみ、その發展の段階としてのみ、歷史的な意義がある。しかるに共同戰線黨の下に、現在の段階においての反ブルジョア政治勢力として結合せられ、また結合せられねばならぬ要素のうちには、當然に、この決定的な鬪爭の展開と共に、×××作用を喪失する可なりに大きな部分のあることを、豫期しなければならぬ。それ故に、現在の段階における政治鬪爭を、かような鬪爭の全發展過程のうちにおいて理解し、この發展の全過程の一部分として正しく指導し得るものは、たゞ×××プロレタリアとその前衛あるのみである。（この事實は、共同戰線黨としての無產政黨を形成するすべての要素に向つて、これと同じ理解と意識とを要求することが、いかに背理であるかを物語つてゐる。しかるに極左主義者は、勞農黨をマルクス主義の純一な指導精神の下にある黨と規定することによつて、この要求すべからざることを要求してゐるのである。この誤謬は、×××プロレタリアとその前衛分子とが、共同戰線黨のうちにおけるその他の諸要素とは異つた、特殊の任務を持つといふ事實に對して、完全に理解を缺くことに基づいてゐる。それは×××プロレタリアとその前衛とを、單なる反ブルジョア的大衆の水準にまで引き下げて意識してゐるものにほかならぬ）。

けれども、×××プロレタリアとその前衛とが、無產政黨のうへに指導的な任務を持つといふこと

は、無産政黨は、かゝる『指導精神の下におかるゝものでなければならぬ』といふ意味では斷じてない。また斷じて、そのような意味であつてはならぬ。

×××プロレタリアとその前衛とは、不斷の生長によつてのみ成熟する。成人の形で生まれ落ちる子供がないように、いかなる國、いかなる所にも、成熟した前衛の結合が、出來合ひに、そこらあたりに轉ろげてゐた例しはない。それは最も幼稚な、未成熟な、從つてまた無力な狀態から發足して、『眞實に大衆的な運動の實踐を通じてのみ』（レーニン）眞實に前衛の名に値いするところのものにまで成熟するのである。それは一年か六ヶ月間のいはゆる『理論闘爭』によつて、手つ取り早く『一と先づ』『一應』確立せられるといふが如き、浮薄な性質のものでは斷じてない。正しい理論と徹透した意識をもつことは、成熟した前衛の重要な特質ではあるが、前衛は『眞實に大衆的な運動の實踐』との離るべからざる關係においてのみ、よくこの理論を把握し、この意識を戰ひ取ることができる。それ故に、キリストの名によつて來るものが悉くキリストでないように、前衛の名を僭稱するものが悉く前衛ではない――たとへば、前衛と僭稱する宗派（セクト）があり得るように――といふ事實はしばらく別としても、眞の前衛にまで生長發達しつゝある要素といへども、或る時期の間は、なほ未成熟な、從つてまた無力な狀態にあることを免かれない。かつこの時期は、相當に長い歲月を必要とする（ロシアのプロレタリアの前衛が、いかにして成長し成熟したかを想起せよ）。しかるに宗派主義者は、この前衛の生長と影響力の增大とに努力する代りに、現在あるところの未成熟な、從つてその力の極めて限られたところのもの――この前衛を僭稱する一握の宗派的朋黨――が機械的に支配し得るように、大衆的共同戰線黨の方を制限しておけと要求する。この要求こそ、前衛の性質ではなくて、宗派たる全特質を自ら暴露したものである。

そこで宗派主義者と吾々との見解の相異は、次の問題に集中する。無產政黨のうちにおける×××プロレタリアとその前衛との任務の極めて重大なといふ點は、宗派主義も、公式としては『一應』承認するかの如くである（しかし、事實においてこれを拒否してゐることは、前述の通りである）。けれども宗派主義者は、この公式から出發して、次の如く主張する――

一、宗派主義の主張――それ故に、無產政黨は、左翼（宗派？）の指導精神の下におかれるようなものに――即ち、左翼（宗派？）が自由に支配し得るようなものに――しておかねばならぬ。これに反して――

二、吾々の主張――それ故に、×××プロレタリアとその前衛とは、無產政黨のうちに、指導を確立しなければならぬ。また指導を確立し得るものにまで生長し、成熟しなければならぬ。

がように吾々の見解によれば、無産政黨を眞實の大衆的な共同戰線黨として、そのうちにあらゆる反ブルジョア政治勢力（鬪爭の現在の段階において、反ブルジョア的政治作用を含有する一切の要素）を結合することにより、一方には、反動的・帝國主義的支配に對する强大な反對勢力を結成し、他方においては、×××プロレタリアとその前衛との直接の影響力の範圍を擴大し（かくすることによつてのみ、前衛は生長し成熟する）、この廣大な要素と勢力とのうちに、指導を確立しなければならぬ。かように前衛は、プロレタリアの歴史的任務の鎖のうちの、當面の最も重大な一環を把握してこれを成し遂げることによつてのみ、生長し成熟する。從つて、無産政黨を眞實の共同戰線黨たらしめることゝ、プロレタリア前衛の生長と、成熟と、その指導の確立とは、吾々の見解では、別々の過程ではなくて、一つの過程である。即ち前衛は、眞實に大衆的共同戰線黨たる性質をもつた單一政黨を實現するための鬪爭により、この鬪爭の成功ある遂行によつてのみ、生長し成熟するものである。

これに反して、もし「マルクス主義政治行動の意識」が、その指導を機械的に維持するために、無産政黨を、その「指導の下におかれるようなもの」にしておくことを要求するならば、その瞬間からこのマルクス主義は、もはやマルクス主義の意識ではなくて、意識化した宗派心に變質したのである。もし×××プロレタリアとその前衛とが、かくの如きことを要求するならば、それはもはや××的でないばかりでなく反動的であり、それはもはや前衛でないばかりでなく、醜惡な宗派にほかならぬ。

「われらの勞農黨は、左翼（宗派？）の指導精神の下におかるゝものでなければならぬ」！。この要求の必然の結果は、勞農黨の内部に巢喰ふところの宗派の結成であり、黨の組織と活動とにおける、民主主義的集中の破壞であり、黨官僚の形成であり、そしてあらゆる代價を拂つても、政治戰線の分裂對立の現狀を、執拗に固持しようとする「果敢な」分裂主義であり、「合同論」に對する恐怖と戰慄であり、政治的統一戰線への大衆の要求に當面しての無殘な動搖と、周章狼狽でなければならぬ。宗派的分裂主義者は、反動的・帝國主義的支配に對する單一政治戰線の形成にまで進出しようとする大衆（「自然生長的」な大衆でさへ、こゝまで進出する！）を、狹隘な組合主義よりも、さらに遙かに狹隘な宗派主義の防壁のうちに喰ひ止めようとする。彼らが若し「左翼」と僭稱するならば、それはたしかに、國際的に比類のない「左翼」の一新類型であつて、即ち、極右翼的性質と極右翼的役割とをもつた「左翼」にほかならぬ。

かように、宗派的分裂主義者の無産政黨に對する（組合運動に對してもまた）分裂政策は、たとへばその理論は正しいが、たま〳〵實踐上の適用を誤つたものであるとか、または戰術上の誤謬と見做

さるべものではなくて、それは彼らの宗派たる本質にもとづくものであり、彼らが前衛として行動しないで、最悪の宗派たる性質によつて行動してゐる必然の結果にほかならぬ。彼らが宗派たることゝ、彼らが分裂主義者たることゝの間には、離すべからざる必然の關係がある。それは二つのものゝ「抱合」ではなくて、彼らの本質とその作用である。

宗派的分裂主義者は、無產政黨を、たま〳〵異つた指導者に率ゐられた勞働者と農民との大衆の四つの黨とは見ないで、そのうちの一政黨（勞農黨）こそは「マルクス主義政治行動意識にまで昂揚せられた」黨であつて、その他の無產政黨の對立物であると考へた（また對立物にまで發達せしめようとした）。そしてこれらの大衆黨の一つ（勞農黨）と自分自身とを同一視（アイデンティファイ）した。彼らは勞働者と農民との大衆的な共同戰線黨――その鬪爭目標は、プロレタリアの社會主義ではなくて、勞働者と農民とその他の被抑壓社會層の利害の擁護とデモクラシー獲得の鬪爭とに制限せられてゐる――の對立を、より高き前衛の獨自の立場から理解することができないで、自らをこの大衆黨の一つにまで引き卸ろし、自らこの對立の當事者となつて他の無產政黨――その背後にある勞働者と農民――と對立した。（註一二）

「コムミュニストは、全體としての無產者（プロレタリアンス）と、どのような關係に立つか？

「コムミュニストは、その他の勞働階級政黨の諸黨派に對立した別個の黨を成すものではない。

「彼らは（コムミュニストは）彼ら自身の何らの宗派的（セクタリアン）な原則を立て、プロレタリア運動をこの型にはめようとするものではない……」（マルクス『共產黨宣言』）

マルクスがこの一節を書いて以來、プロレタリア運動の形態の上には、大なる變化を見た。けれどもこの精神は、依然として全世界を通じてのコムミュニストの精神である。しかるにわが國には、勞働者と農民との大衆的政黨の一つに割據し、これを彼らの宗派的見解の型にはまつた運動に變質することによつて、勞農大衆のその他の部分とことさらに對立し、この對立によつて、わづかに自己の宗派的存在を續けてゆかうともがいてゐる自稱マルクス主義者の一群がある――

かの前衛的指導機關を僭稱するところの、かの厚顏無恥な「無產者新聞」が、府縣會選擧における勞農黨の得票が、その他の三政黨に對して比較的に多ほかつたことに有頂天になり、ブルジ・アジーに對してゞはなくて「エセ無產政黨」に對するこの「輝やける勝利」を歌つた陋劣な心事が、彼らの眞性質の一切を語りつくしてゐる。

かように彼らは、自ら前衛を僭稱しつゝ、前衛の比類のなき獨自の立場と任務とを、全く理解しなかつた。それ故に、彼らは、勞働者と農民との大衆黨の見地と眼界以上に、自らを「昂揚」することができなかつた。それ故に彼らは、その他の無產政黨の背後にある勞働者と農民との大衆と、ことさ

らに對立し、その指導精神の克服によつてのみ――これは實踐上では、對立政黨に對する分裂政策を意味してゐる――自らの勢力が擴大するといふ結論に到達したのである。

宗派的分裂主義者は、前衛と大衆的共同戰線黨との區別を知らないで、自らを大衆黨のうちに沒入したばかりでなく、彼らは前衛黨と勞働組合との區別をさへも理解しなかつた。それ故に、勞働組合の分裂對立を、前衛獨自の立場から見ることかできないで、これらの對立組合の一つ（日本勞働組合評議會）と自分自身とを同一視（アイデンチファイ）した。そしてその他の組合勞働大衆と自分自身とを對立させた。彼らは統一運動をも指導（?）した。けれども、自らをいはゆる『左翼組合』の水準に引き卸ろして、その他の組合大衆と對立するところの、前衛ならざる宗派によつて指導（?）せられてゐる間は、いはゆる統一運動は口に統一を稱へつゝ、組合運動の對立と分裂とを深める作用以外の、いかなる作用をもなし得なかつたことは、もとより當然と云はなければならぬ。

かくの如く、わが宗派的分裂主義者諸君は、レーニンの『何を爲すべきか?』を『一應』讀み了り（然り『結合の前の分離』から、最後の『無產階級政治新聞』の章までを!）あわたゞしくもこゝに『主體的條件』を『一應』戰ひ取つて』首尾よくプロレタリア前衛にまで羽化登仙したにもかゝはらず、無產階級運動における前衛の特殊な比類のない性質と任務――この羽衣――を置き忘れた。それ故に、彼らは前衛の任務を、大衆的共同戰線黨のうちに解消し、『左翼組合』のうちに解消し、組合統一運動のうちに解消し、從つてまた、左翼組合と左翼的統一運動とを、その機械的な支配の下におくように、左翼政黨をもその機械的支配の下におくことによつて、その宗派的勢力を維持しようとしたのである。かくの如く宗派的分裂主義は、たゞ一つ前衛の性質をも備へてをらぬ代りに、宗派的朋黨の一切の性質を備へてゐる。宗派的分裂主義の分裂的作用は、反動的・帝國主義ブルジョアジーの最も緊急な必要とその政策――無產階級戰線の分裂とその分割政策――とに呼應するところの、最惡の右翼的作用にほかならぬ。

勞働者と農民との政治戰線の統一――組合戰線の統一もまた――は、大衆自らが、かの意識的右翼主義者の分裂主義と共に、その協同者たる極左小兒病者の宗派的分裂主義――この最惡の極右翼的作用――を、その陣營から徹底的に清算することによつてのみ、初めて實現することかできる。（註一三）

（註一三）最近にいたつて、彼らもまた、前衛黨と大衆的共同戰線黨とを混同したかような解黨主義的誤謬を訂正しなければならぬ、何らかの必要に迫られたもの丶如くである。けれども彼らは、この誤謬を清算しようとはしないで、これを胡麻化すことに浮身をやつしてゐる。大衆の面前において自己を批判し、徹底的にかつ公然とその誤謬を清算することは、前衛のみが有する特質の一つである。彼らの周章狼狽と、ひたすら前非を胡麻化し去らうとしてもがいてゐる最近の態度は、彼らの非前衛的宗派の眞性質を、もう一度大衆の前に暴露したものであ

る。諸君は暴露に暴露を重され始めてゐる！

それ故に、吾々が無産政黨樹立のあらゆる段階を通じ、その分裂對立のあらゆる時期を通じて、一貫して無産階級政治戰線の統一を主張し得たのに反して、宗派的分裂主義者は、前衛の比類なき性質と任務とを、大衆的共同戰線黨のうちに解消し、無産諸政黨の對立を超越した獨自固有の見地を有しなかつたがために、彼らは外部的勢力によつて强制せられるまでは、無産政黨の合同を主張し得ず、終始一貫、分裂主義者として行動してゐるのである（註十四）。

（註一四）宗派的分裂主義者は、その分裂主義を擁護するための謂ゆる『戰鬪的統一戰術』なるものを裏書きするために、特にコミンタン第五回大會の『戰術に關するテーゼ』の一節を引用し、吾々が、かくの如き『最も肝腎な點は殆んど全く看過してゐるか、又は看過したやうな顏をしてゐる』ことに對して、嚴重な抗議を申込んでゐる。（『マルクス主義』十月號）。

私は諸君の注意が、多少とも、この種の文書に向つたことを、慶賀するものである。なぜならば、各國における實踐の經驗を綜合してゐる一點においても、それは極めて重要なものだからである。けれども、若し諸君に向つて、なほその上の希望を述べる僭越が許るされるなら、重要な意義をもつこの文書は、現に諸君が評價せられてゐるよりも、なほ一そう重要に評價するといふ意味において、もつと丁寧に讀まれたいといふことである。

『マルクス主義』十月號において引用せられたテーゼの一節は、次の通りである。

『統一戰線の戰術は、たゞ一定繼續期間における大衆の××並に××的動員のための一方法たるに外ならぬ。かくの如き戰術を以つて反××的なる社會主義的諸黨との、政治的獨立と解せんとする一切の試みは、即ち日和見主義であつて、コミュニスト・インテルナチヨナールの排擊するところである』（『マルクス主義』の譯文による）。

いふまでもないが、こゝに『統一戰線』とあるのは『共同戰線』と同じ原語である。

第五回大會は、各國共產黨の共同戰線の實踐における、極左的並びに右傾的な踏みはづしを批判し訂正した、重要な大會であつた。いふまでもなく、こゝにテーゼが規定し批判してゐるのは、共產黨がその他の諸黨派との間に一時的に形成する共同戰線についてである。共產黨が、その他の黨派と合同するなどゝいふことは無論のこと、恒久的獨立を結ぶといふことも、固よりあつてはならぬ。（無產政黨が共同戰線の黨であるといふ場合には、もろ〳〵の反ブルジョア的政治要素が、一つの組織のうちに、恒久的に結合するのであつて、共產黨とその他の黨との場合における、『一定繼續期間に於ける』共同戰線――即ち本來の『共同戰線』といふ言葉の意味とは、おのづから相異があることは、さきにも指摘した通りである。それ故に、無產政黨は、共同戰線の『特殊な』一形態なのである）。

かような共產黨とその他の黨派との關係を規定したテーゼの一節を讀んで、諸君が何らの疑ひもなく、これを以つて直ちに勞農黨と日勞黨との關係についての、諸君のすばらしい戰術を裏書きするものと諒了し、平氣で、しかもこれを他人に對する抗議の資料として突きつけたのは、次の如き二つの動かすことのできない事實を、入念にも、もう一度諸君自らの手で立證したものである。

第一には、諸君は、共產黨とその他の黨派との關係を、そのまゝ勞農黨と日勞黨との關係と認めてゐることである。これはいかに諸君が、『共同戰線黨は、今やわが勞働農民黨として結成されつゝあり』と云つてみたところ

で、勞農黨を前衛黨まがいのものにしておかうとする諸君の熱心、ないしは共同戰線黨と前衛黨との、かつての餘燼が、依然として昔の通りに、執拗に、諸君につきまとうてゐるといふことである。諸君は、そのうちから生まれてきたこの舊い考へから、事實上、今日も何らの離脱前進をしてゐないことを立證したのである。

第二には、諸君は勞農黨とその他の無產政黨との關係を、絕對に合同を許さないところの、共產黨とその他の黨派との關係と認めてゐることである。これによつて諸君は、無產政黨の合同のあらゆる可能を、絕對に拒否することを宣言し、合同『一般』賛成の保護色にかくれた、合同『全般』の拒否者であることを明らかにしたのである。

（七）政治的統一戰線へ！

以上によつて、吾々は、無產階級政治鬪爭の現在の發展段階において、掴まなければならぬ鎖の一環が、現在の社會に孕まれてゐる一切の反ブルジョア的政治勢力の、廣大な結成にあることを見た。從つてまた、これが×××プロレタリアとその前衛との、當面の最大の任務であることを見た。そして×××プロレタリアとその前衛とは、この任務の成功ある遂行によつてのみ、またこの實踐を通じてのみ、その生長と成熟を遂げ、その影響力を擴大し、その指導を確立し得るといふことを見た。のみならず、ブルジョアジーの反動的帝國主義的支配の確立と、これによつて保障し增大せられる經濟上の壓迫の增大とは、かつては反ブルジョア的潛在勢力として眠つてゐた廣大な社會層をも、漸次に活潑な現動勢力に發展させ、强大な反ブルジョア政治勢力の結成を可能としたばかりでなく、大衆自らも、この方向を指して、急速に動いてゐることを見た。

次にこの重大な任務の遂行における、當面の最も手近かな段階が、分裂對立した無產階級の政治戰線の統一にあることを見た。

しかるにこれらの無產諸政黨の對立は、今日はなほ、それ〴〵の黨の社會階級的構成と結合して、固定化して居らぬ。これは戰線統一の機會と可能とを大きくする。

これらの諸黨派の社會階級的構成は、大體において、單一な共同戰線黨に合同することを妨げない。けれども少數指導者の思想、ないしは『指導精神』の相異の程度、指導者と黨大衆との結合の狀態、右翼大衆に對する左翼的影響の範圍等は、これらの諸黨派、ないしはその大衆が、同時に、かつ同一の過程によつて、單一共同戰線黨に結合することを、ほとんど不可能ならしめてゐる（少なくとも絕望的に困難ならしめてゐる）。それ故に、吾々の統一戰術の基準としては、政治的統一戰線の實現せられる過程は、黨と黨との合同から、分裂主義的な指導者を排除した、大衆と大衆との直接の結合にいたるまでの、極めて多くの段階を含んだ、しかも極めて彈力性のあるものでなければならぬ。

かくの如く、現在の無產四政黨は、その社會階級的構成からいへば、同時に、全體の合同を妨げない――また、これを必要とする――にもかゝはらず、實際においては、或る黨と黨との間には、直ちに合同が進捗し、他の黨との間には、部分的一時的な共同戰線が形成せられるといふような、合同への過程の異つた段階が踏まれるといふことは、決して合同論の根據たる事實と、相反するものではない。

のみならず、無產四政黨間の現在の對立は、その根據が薄弱であつて、なほ浮動の狀態にある。それ故に、今日、或る黨と黨との合同の不可能な狀態も、明日は、これを可能とする形勢を展開する餘地がある。たとへば、極めて少數の指導者の地位に變化が起こつたといふ僅かな事實のためにも、形勢は全く變化する。これは現在の對立が、固定して居らぬことを意味してゐる。從つて、現在の對立政黨が、單一な共同戰線黨に結合する過程は、黨と黨との全體的な合同によつて行はれる機會と可能とが、極めて大きいといふことができる。それ故に、政治戰線統一のための左翼的戰術は、この結合が、黨と黨との全體的な合同によつて實現せられる範圍を、でき得るかぎり擴大する方向に向けなければならぬ。たとへば一時的な共同戰線の形成の如きも、對立政黨を唯だひたすらに「つぶしてその大衆をわが黨に取る」ことを目的とする硬直な彈力性のないものではなくて、眞實に、共通目的のための闘爭を有效にし、共同戰線の效果を證據だて、これによつて右翼指導者の下にある大衆の間に、政治的統一戰線に對する意識と要求との生長を助け、かくすることによつて、黨と黨との全體的な合同を可能とするような形勢の促進を目標としなければならぬ。對立政黨を「つぶして大衆を取る」ための共同戰線戰術――宗派的分裂主義者のいはゆる「戰鬪的統一戰術」――は、なほ固定してをらぬ現在の對立の、急速な固定化を促進するに過ぎないものであつて、それは多くの場合、大衆のうちの僅かに一小部分を奪ひ取る能力さへもないものである。

かゝる政治的統一戰線の形成せられる過程において、右翼的影響は、常にこの過程の進行を妨げる力として現はれる。右翼的影響は、單一政黨への結合が、黨と黨との全體的な合同によつて行はれる範圍を縮少する作用である（かゝる作用をもつものこそ、右翼的傾向である）。そしてこの傾向と作用と闘つて有效にこれに打ち勝つことが、左翼當面の任務である（それ故に、眞實に「左翼的」性質をもつた分裂主義と合同反對論はあり得ない）。

しかるに極左的宗派主義者の一群は、彼らが割據する一無產政黨の上にその宗派の機械的支配を維持する必要から、マルクス主義的詭辯の旗の下に、無產政黨の合同に反對して、「執拗果敢」に闘つてゐる。彼らは、かくすることによつて大衆の必要と闘ひ、大衆の要求と闘ひ、×××プロレタリアの

歴史的任務の遂行と闘つてゐる。それは右翼的作用を有するばかりでなく、その役割は、反動以外の何ものでもない。

けれども反動的・帝國主義的支配に對する强大な反對勢力にまで結成しようとする大衆の熾烈な要求は、いまや政治的統一戰線と「合同」との要求となつて、澎湃として彼らの脚下から湧き上がつてゐる。彼らは大衆の進出を、政黨愛國心に訴へて、偏狹な宗派主義のうちに抑止しようとする。彼らは中傷と、離間と、宣傳と、排擠と、その他のあらゆる手段に訴へて、合同論の危險思想鎭壓につとめてゐる。けれども大衆の進出は、これを阻止することはできぬ。彼らが宗派的分裂主義を固執するならば——記憶せよ！　政治的統一戰線の實現せられる過程は、黨と黨との合同から、分裂主義的指導者を排除した大衆と大衆との、直接の結合までを含む彈力性のある過程であることを！　——右翼大衆のみが、この作用を持つのではない。左翼大衆はその左翼的性質の故に、もつとこの作用を備へてゐなければならぬ。

宗派的分裂主義者は、いまやこの致命的な岐路に立たしめられてゐる。彼らは、自らを活かしめるためには、大衆の要求と、これを反映した吾々の「合同論」とに追隨し來るだらう。政治的統一戰線へ！（昭和二年十一月十日）。

無產政黨問題の再吟味

（一）戰線統一問題の現狀
（二）共同戰線黨とは何だつたか？
（三）種々なる反ブルジ・ア社會勢力の結合
（四）闘爭の種々なる發展段階の結合
（五）英國からの若干の實例
（六）共同戰線の諸形態
（七）共同線戰黨とプロレタリア前衛黨
（八）單一政黨の實現は可能であるか？

（一）戰線統一問題の現狀

昭和二年末に初めて表面に現はれた無產政黨の合同と戰線統一の運動は、昨日（十月廿九日）の地方六政黨の統一戰線協議會の決議――社民、大衆、および近く結黨式を擧げる新勞農黨に對する即時合同の提議――をもつて、一つの時期を閉ぢようとするもの丶如くに見える。

この前後二ヶ年に亘る統一運動の唯一の收穫は、昨年八月の七黨合同による、日本大衆黨の成立であつた。日本大衆黨の成立は、一般大衆の戰線統一に對する熱望を代表したものであつたと同時に、たゞに關係七黨の黨員ばかりでなく、一般大衆をして、戰線の統一に對する熱情を高めしめ、その實現に對して自信を持たしめた。かように七黨合同の成立は、一般大衆の凝視の的となつてゐたゞけに、僅々數ヶ月後におけるその分裂は、大衆をして深刻な幻滅を味はしめた。日本大衆黨の分裂は、すべての反對理論を合はしたよりも有力に、事實によつて統一戰線の主張をその背後から襲擊し、合同運動に對して常に懐疑と冷笑の態度を取り來つた意識的な右翼主義者のために、その立場を裏書きした。無意味な對立抗爭によつてすでに疲れてゐた大衆は、たゞ分裂するが爲めの無意味な合同によつて、一そう疲れ果てた。かうして、少くとも七黨合同に關心を持つた大衆の間には、言ふべからざる失望

と共に、戰線統一の問題に對する無關心と不活動とが現はれた。かような心境におかれてゐる大衆に對して、かの清黨問題や分裂反對同盟の如き運動が何ら訴へる力を持たなかつたことは、當然自明のことであつた。大衆は、戰線統一に對する熱情と共に自信を失つた。合同運動の高潮のあとには、むしろ現狀を維持することによつて動搖を免れようとする退嬰的な氣分と、安定への意欲とが、大衆を支配した。これは勢ひ大衆をして、事なかれ主義に終始する自黨の保守的な指導者の方針を、無條件的に支持せしめる。差當り自黨の勢力を固定化することをもつて滿足しようとする日本大衆黨の最近の傾向は、大衆のかような心理を代表するものと云ひ得られる。かように戰線統一に對する大衆の下からの壓迫は、今や著しく弱められた。

社會民衆黨のその後の著しい傾向は、少くともその有力な指導者が、この政黨を、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主主義政黨として固定化することを、意識的に努めてゐることであつて、これらの指導者自身が、最近には、公然と社會民主主義黨を名乘るにいたつたことは、注目に値ひする。彼らは、社會民衆黨をかような性質に固定せしめるためには、恐らくは分裂の犧牲をも辭しないであらう。

近く成立する新勞農黨が、戰線統一の問題について、如何なる態度を取るかは明かでないが、提案

書に現はれてゐる限りにおいては、依然として、謂ゆる「戰鬪的統一戰術」――輝ける指導精神による他黨の征服――といふ舊勞農黨の傳統を守るものと見做される。この政策に變化のない限り、新勞農黨もまた、戰線統一への力としてよりも、寧ろ、既得の勢力範圍を固定しようとする力として働くものと見做さゞるを得ぬ。

この間において、地方六政黨の協議會のみは、變化を代表する力であつて、社民、大衆、および近く組織せられる新勞農の三黨に對して、即時合同の提議を決議した(昨廿九日の第二回協議會において)。けれどもこの力が、よく三黨の、固定化の方向に働いてゐる力に打ち克ち得るかは疑問である。三黨に對する合同の提議が、一般の豫想の如く不成功に終つた場合には、これらの地方政黨は、全體的にまたは部分的に、いづれかの全國的政黨に合同するか、または協議會として或る時期の間固定する。この地方政黨の動きが停止したところで、無產政黨の分野は、三黨の鼎立または四勢力の並立の狀態において、一と先づ安定する。かように地方政黨協議會の統一戰線に對する最近の決議は、合同運動における過去二ヶ年間に亘る一つの時期の終結を意味するものであつて、大衆の間に、戰線統一に對する熱意と自信とが再び燃え上るまでは、合同問題は、暫らく後景に隱されることを免かれない。

かうしてわが國の無產政黨は、戰線統一の見地から見れば、二ヶ年間の努力の終りにおいて、その

出發點においてと殆んど同一の位置におかれてゐる。かような形勢は、戰線統一の主張を支持し來つた人々の間にさへも、幾分の動搖と疑惑を生ぜしめてゐる。單一政黨とは何であつたのか？　共同戰線黨とは何であつたのか？　それは幻影に過ぎないものではなかつたか？　そして左右兩翼の對立政黨の存在をもつて必然とする右翼主義者の主張が、正しいのではなかつたか？　と。

これらの問題を論じることは、或る意味においては、今日はその時機でない。けれども他の意味においては、今日は最も適切な時機である。

（二）共同戰線黨とは何だつたか？

單一共同戰線黨の實現を目標とした運動の、二ヶ年に亘る一時期を終らんとする時に、共同戰線の黨とは何だつたか？　と問ふことは、幾分の皮肉を覺えざるを得ぬ。けれども戰線統一の運動が、さらに新たな一時期を開始するためには、この質問の提起は、絶對に必要である。大正十四年に初めて具體的な形を取つた無產政黨樹立の運動は、二つの言葉によつて、その努力の方向を明かにした。それは「單一無產政黨」と「共同戰線黨」といふ言葉であつた。この二つの言葉は、その實現に努力してゐるところの政黨の性質を、二つの方面から言ひ表はしたものであつて、兩者の間には、離るべからざる關係があつた。卽ち無產者勞働農民の政黨が、單一政黨の形態をもつためには、それはまた必然に、共同戰線の特殊な一形態たる性質を持たなければならなかつた。

では單一政黨とは、何のためにする、何者と何者との共同戰線の一形態であらうか？　云ふまでもなく、ブルジョアジー、ことに帝國主義時代の特徵を漸く明確にして來たブルジョアジーの政治的支配に對して、共通の利害を主張する鬪爭のために、異つた社會層の間に形造られる共同戰線である。これらの社會層ないしは社會階級のうちには、先づ第一に、嚴密な意味でのプロレタリアたる工業勞働者と、無產勞働民たる小作農、種々なる頭腦勞働者または俸給生活者のほかにも、地方にあつては、むしろ小作農以上に窮迫した經濟狀態の下にある小農民の或る部分と、都會におけるその照應物たる小商人の或る部分、その他一般に、財產によらないで自已の勞働または勤勞によつて生活する無產市民が數へられてゐる。

假りにこれらの要素が、無產政黨の構成要素を成すものだとしたならば、この政黨の內容は、決して純一な階級的構成をもつものではない。またこれらの社會層が、ブルジョア政治勢力に對して單一な戰線を形成するといふことは、必ずしもこれらの異つた社會層の具體的な利害が、悉く同一であるといふ意味において一致してゐることを意味しない（同一であるものも少なくないが）。けれどもこれ

らの社會層のおの〳〵が、帝國主義ブルジョアジーの利害と相反したそれ〴〵の（よし互に異つてゐようとも）利害を有するとしたならば、個々の具體的な利害の同一によつてゞはなくても、反ブルジョア的勢力であるといふ事實において、共通の利害をもつてゐる。例へば八時間勞働の要求と耕作權保證の要求とは、勞働者と農民とにそれ〴〵な利害にもとづく要求であつて、これらの二つの利害は同一であるといふ意味で一致するものではない。けれどもそのいづれもがブルジョアの利害に反對した利害であり、共通の反對勢力に對する鬪ひによつてのみ獲得せられるといふ意味においては、共通な反ブルジョア的利害である。從つてこの範圍においては、ブルジョアジーの政治的支配に對して、共同の戰線を形成することができる。

かように單一政黨は、横には、資本主義社會に同時的に並列する異つた階級または社會層の間の共同戰線であるが、縱には、異つた發展の段階または水準にある意識の間の、共同戰線を意味してゐる。即ち共同戰線黨の內部には、最も成熟したプロレタリアの階級目的に對する明確な意識から、最も初歩的な反ブルジョア的利害の意識にいたるまでの、あらゆる段階と色合とを含んでゐる。

農民は、現に帝國主義ブルジョアの支配と鬪はざるを得ない狀態におかれてゐるにもせよ、嚴密な意味でのプロレタリアではない。頭腦勞働者は、或る場合には、新中流階級を構成するものだとさへも云はれてゐる。小商人と小農民とその他の謂はゆる無產の小市民群とは、大部分はブルジョア・イデオロギーによつて支配せられて居り、時としては反動主義の勢力の主要な源泉となることさへもある。從つてこれらの階級または社會層は、具體的な利害においては、帝國主義ブルジョアと一致することのできない何物かを持つてゐるにも拘らず、獨立で有力な反ブルジョア的勢力となることはない。これらの社會層の利害は、多くの場合、反ブルジョア的性質を意識しない反ブルジョア的利害であつて、從つてこれらの社會層の反ブルジョア作用は、眠つてゐる反ブルジョア作用、ないしは潛在的な反ブルジョア勢力であつて、共同戰線黨の一構成要素として帝國主義ブルジョアジーの支配に對峙する獨立の反對政治勢力に結成せられた時にのみ、それは初めて現動勢力に變形する。

共同戰線黨の構成の以上の如き性質から、當然に次の如き結論が現はれる。即ち、共同戰線黨は、改良主義者をも、組合主義者をも、議會主義者をも、社會民主々義者をも（戰前の意味での）××主義者をも、その他いかなる『指導原理』を奉ずる要素をも包容することができる。たゞこれらの要素が、反ブルジョア的な利害を有する限りにおいてゞある。そして共同戰線黨の結合の條件となるものは、これらの反ブルジョア的利害であつて、いづれの指導理論でもあり得ないといふ意味において、共同戰線黨は社會民主主義黨であり得ないように、共產主義黨でもあり得ない。右翼主義をもつて結

合の條件とする政黨であり得ないように、左翼主義をもつて結合の基礎とする政黨でもあり得ない。かような政黨が、嚴密な意味においての――即ち、プロレタリアの歴史的任務を最後まで遂行し得るといふ意味においての――階級的政黨でないことは云ふまでもない。けれどもプロレタリア以外の社會層の反ブルジョア的利害が、プロレタリアの階級的利害と結合され、かくすることによつて、資本主義社會のうちに眠つてゐる反ブルジョア的潜勢力が現勢力に轉換され、帝國主義ブルジョアの政治的支配に對する反對作用が最大限度に發揮され、鞏固にされることが、プロレタリアの歴史的任務に一致し、プロレタリアの階級目的と同一の方向を指してゐるといふばかりでなく、それはプロレタリアが、その歴史的任務を完全に遂行するために必要缺くべからざる條件であるといふ意味においては、共同戦線黨は、階級的の政黨であると云ふことができる。

わが國の無産政黨の樹立運動が、『單一政黨』と『共同戦線黨』とによつてその方向を示した時、それはかような性質を有する政黨の實現を目標としたことを意味してゐる。けれども共同戦線黨のかような性質は、これを主張する人々によつてさへも、無産政黨樹立運動の道程において、しば〳〵眼界から見失はれてゐた觀がある。

(三) 種々なる反ブルジョア社會勢力の結合

かような共同戦線は必要だらうか？　プロレタリアの階級的任務を擔當し得るものは、プロレタリアのみではないか？　プロレタリアが、その他の階級または社會層と提携することは、その階級目的の妥協ではないか？

共同戦線黨はそのうちに、プロレタリア以外の種々なる社會層を含むとしたならば、この政黨が、プロレタリアの階級目的をもつてその結合の基礎または條件とすることができないことは、云ふまでもない。この意味では、共同戦線黨はプロレタリアの立場から見れば、その他の社會層の利害に對する讓歩または妥協を意味してゐる。

けれどもプロレタリアの階級的任務を擔當し得るものはプロレタリアのみであるといふことから、プロレタリアがその他の社會層と提携または同盟することの必要を疑ふのは、資本主義と名づける社會形態は、たゞプロレタリアのみによつて新たな社會形態に變革される、この社會的變形の過程にはたゞプロレタリアの勢力のみが作用するといふ、誤つた見解に基づいてゐる。資本主義は經濟的には、そのうちに包藏してゐる一切の生産力と共に一切の矛盾を發展し切らないでは消滅せぬように、プル

ジ・アジーの支配は、そのうちに包藏する一切の反對勢力の作用が發展した結果としてでなくては、消滅せしめることはできぬ。しかるにプロレタリアは、資本主義の内包する特徴的な反對勢力ではあるが、決して唯一の反對作用ではない。資本主義は經濟的にも、その發展の各段階において、次から次と新たな矛盾を造り出してゆくように、ブルジ・アジーの支配は、その發展の諸段階において、種々なる反對勢力を造り出し、若くは種々なる勢力を反對勢力に轉化し、種々なる社會層を、自分自身に對する反對の作用に變化する。例へば、ブルジ・アジーの支配が、中世紀的勢力と抱合したブルジ・アが寡頭政治であつた時代には、新興の商工階級を主要なその反對勢力たらしめたが、選擧權の擴張によつてブルジ・アジーの支配の基礎が擴大せられると、小ブルジ・ア層を主要な反對勢力にした。ブルジ・アジーの支配が、ブルジ・アジーの一部の支配からブルジ・ア全體の支配となるにつれ、無產階級は漸次に能動的な反ブルジ・ア勢力に轉化する。また資本の支配の集中は、小ブルジ・ア下層をプロレタリア化して、絶えず反對勢力に變形させ、都市ブルジ・アと地主階級との同盟は、農民の大衆をブルジ・アジーの支配に對する有力な反對勢力たらしめる。さらに金融資本の帝國主義的反動政策と資本主義の頽勢にもとづく經濟上の壓迫とは、ブルジ・ア・デモクラシーの達成によつて一度び反對作用を中和せられてゐた社會層の間にさへも、再びその作用を喚び起こす。等々。すべてこれら

の反對勢力がブルジ・アジーの支配に與へる一切の作用は、云はゞプロレタリアの完成的な作業の準備をなし、その足場を築づき、これに必要缺くべからざる條件を造り出してゐるものであつて、これらの社會層が反ブルジ・ア的な作用を含んでゐる限りは、この作用を最大限度に發展せしめることは、プロレタリアに取つて、必要缺くべからざることである。

そこで若し、反ブルジ・ア的な利害をもつた種々なる階級または社會層が、單一な政黨ではなくて各々の政黨に組織せられてゐるとしたならば——例へば、農民黨と、勞働者黨と、多かれ少かれ中間階級的な傾向を現はす小市民黨と、嚴密な意味でのプロレタリア黨とに、別々に組織せられてゐるとしたならば——どうだらうか。この場合、これらの諸黨派が、その最終目標においてプロレタリアのそれと一致すると一致しないとに拘らず、苟もブルジ・アジーの支配に對して現實に反對した利害を追求し、その作用が現に反ブルジ・ア的方向を取つてゐる限り、これらの諸黨派と共同の戰線を形造ることは、プロレタリアの黨に取つて、絶對に正しい戰術であることは疑ひがない。

けれどもこれらの社會層は、何時でも、また如何なる條件の下においても、一定不變の反ブルジ・ア的作用をもつものではない。或る社會層は、鬪爭の或る段階に達すると、その反ブルジ・ア的作用を喪失する。しかるに他の社會層は、階級鬪爭のさらに進んだ段階に達するまで、その反ブルジ・ア的作

用を保つてゐる。一定の改良を目標とする運動は、これに對するブルジョアジーの全部的な讓歩と妥協とにより、その闘爭力を失つて凋落する。土地を要求する農民の××的作用は、土地の獲得によつて中和される。例へば、若し農民に豊かな生活を保證するような、經濟的に合理にしてしかも大規模な自作農の創定が實現せられたと假定したならば（これは到底不可能であるが）わが國における農民運動の少くとも一大部分は、反ブルジョア的作用を中和せられるに違ひない。

かように種々なる社會層の反ブルジョア的作用は、階級闘爭の發展の或る段階において、云はゞ飽和點に達し、若くは中和される。從つて反ブルジョア共同戰線の包容し得る、また包容すべき、社會階級的内容は、すべての場合に同一なものではない。

では、わが國の現在の場合はどうだらうか？　私はこゝでは、わが國の資本主義と階級闘爭との現在の發展段階においての、種々なる社會層の作用を分析する代りに、無産政黨運動において一般に認められてゐる一致の見解から出發した。即ち、すべての無産政黨は、勞働者と農民と無産小市民層とに呼び掛けてゐる。この點においては、日本×××も、舊勞農黨も、日本大衆黨も、社會民衆黨も、その他の地方政黨も（近く生れんとする新勞農黨も恐らくまた）何らの違ひはない。若しその間の差異を求めたなら、舊勞農黨が主として農民から成る政黨だつたのに對して、社會民衆黨が小市民層に重きを置かんとすること、等々であつて、これらの社會層を反ブルジョア的な勢力と認め、現に反ブルジョア的な作用を營んでゐる要素と認める點では、すべての政黨は一致してゐるのである。

しかしながら、斯ような共同戰線は、すべての場合に、必ずしも單一政黨の形態を取つてのみ實現せられるものではない。私は前段において、反ブルジョア的な種々なる社會層が、それ〴〵の政黨に組織せられてゐる場合を假定することによつて、既にこのことを暗示した。さらに種々なる異つた階級または社會層が、同時的に反ブルジョア的活動をしてゐる場合もあるが、必ずしも、いつでも同時的に反ブルジョア的な現勢力として活動してゐるとは限らない。或る階級または社會層の反ブルジョア的作用が中和せられた後に、他の階級または社會層が、初めて活動の舞臺に登場する場合もある。けれども、何づれの場合においても、資本主義社會から新たな社會形態への推移は、これらのすべての反ブルジョア的作用とその相互作用との總効果としてのみ現はれる。たゞプロレタリアはこれらの作用のうちで、決定的な作用を持つてゐる。またこれらの作用は、大部分は無意識的に行はれる。そしてプロレタリアは、その作用に對する明白な意識に到達する。

（四）闘爭の種々なる發展段階の結合

プロレタリアのみが、反ブルジョア的作用を持つ唯一のものでないように、プロレタリアの階級目的を意識した闘爭も、如何なる場合においても、その他の條件から離れて、それ自身のみで決定的な役割を演ずることは、斷じて不可能である。資本主義に對する究極の勝利は、最も初歩的な意識による闘爭から、最も發達し成熟した階級意識に基づく闘爭にいたるまでの、あらゆる意識に照應した闘爭、あらゆる部分的な目標のためにする闘爭の効果の結合としてのみ齎らされる。かようなプロレタリアの決定的な闘爭には、より初歩的な幾多の部分的な闘爭が、無意識的に貢献する。たゞプロレタリアの階級目的を意識した闘爭は、これらの闘爭のうちに決定的な役割を持つばかりでなく、これらの闘爭の効果を、意識的に、そして最も有効に、階級目的のために結合する任務を負うてゐる。

けれどもこれらの、より初歩的な闘爭は、同時的に行はれてゐるばかりでなく、時代的に連續する。そしてこの場合には、闘爭の効果は意識的に結合せられないで、多くの場合、無意識的に累積せられる。そして明確な階級目的を持つプロレタリアが現はれて、初めてこの無意識的に累積せられた効果を、階級目的のために、意識的に結合する。

しかしながら、意識の種々なる發展段階を代表し、そして種々なる部分的な目標のためにする、より初歩的な闘爭の効果がかように結合せられる方法と形態とは、一樣でない。即ち、これらの闘爭が時代順に連續的に展開せられる場合には、前の闘爭の效果が次の闘爭の基礎となり、出發點となり、陣地となることによつて、この二つの闘爭の效果が結合される。またこれらの闘爭が同時的に展開されてゐる場合にも、この結合は、或る時には無意識的に行はれ、他の時には別々の運動、別々の團體間の一時的部分的な協力によつて行はれ、さらに他の情況の下においては、一つの團體または一つの運動の形成によつて行はれるの類である。けれども如何なる場合にも、これらの効果の結合なくしては、プロレタリアの決定的な勝利を考へることはできぬ。いな決定的な闘爭の展開されることさへも考へることはできぬ。

二三の具體的な場合について、説明して見よう。現在の英國には、勞働黨と共産黨とが指導を爭うてゐる。勞働黨の見解によれば、共産黨は、英國の勞働階級の陣營を掘り崩さうとする、一握りの攪亂者の徒黨である。これに反して英國共産黨の見解によれば、勞働黨はブルジョア支配の手先きの黨、ブルジョア第三黨以外の何ものでもない。けれども、勞働黨の闘爭の効果から離れて、英國共産黨の闘爭を考へることができるだらうか？　過去においても、勞働黨の四分の一世紀の間の闘爭の効果な

くしては、英國共產黨の鬪爭の出發點さへも無かつたであらうといふことは、疑ひの餘地がない。更に現在と將來とにおいても、勞働黨が確實に政權を握るにいたることは、英國共產黨の鬪爭が有効に展開せられるために缺くべからざる條件であつて、英國共產黨はこの時期において、初めて準備的な時代から眞實の舞臺に登るものだと云ふことができる。この事實は、何を意味するだらうか。それは第一には、よし英國の勞働黨は、急速に、ブルジョアジー第三黨たる性質に轉化しつゝあるにもせよ、ブルジョアジーの政治的支配に對する本來の作用を、未だ全くは中和し盡されてゐないことを意味してゐる。言葉を換へて云へば、勞働黨は共產黨の主張するように、今やブルジョア第三黨への限界に立つてゐるにもせよ、その鬪爭は、なほブルジョアジーの支配の上に何らかの作用を與へて居り、その效果は（無意識的にもせよ、または勞働黨の指導者の意に反してにもせよ）プロレタリアの究極の目標のためにする鬪爭の効果と結合せらるべき、何ものかを存してゐるといふことを意味してゐる。そして勞働黨のかような作用が全く發展し盡され、中和し盡されるまでは、勞働黨にはなほ存在の意義が殘つてゐる（プロレタリアの立場からも）。そして英國共產黨が、今日まで大衆的に生長することのできぬ根本的な理由も、またこゝにある。第二には、勞働黨と共產黨との間には、今日は、意識的には何ら協力の關係はなくて、たゞ對立と排擊との關係があるばかりであるが、それにも拘らず、客觀的には、英國プロレタリアの決定的な勝利は、兩者の鬪爭の効果の結合によつてのみ齎らされる。そして實際においても、それは現に、時々刻々に、結合されつゝあると云ふことができる。

ドイツの場合には、階級鬪爭展開の二つの段階を代表する鬪爭が、英國の場合よりも、一そう連續的な形を取つて續づいてゐる。即ち、社會民主黨の反ブルジョア的勢力としての作用が殆んど中和し盡されんとするところに、初めてドイツ共產黨の鬪爭が始まつた。ブルジョアジーの支配に對するドイツ社會民主黨の作用は、一九一八年の革命によつて、殆んど中和し盡された。ドイツ社會民主黨の政治上の立場は、革命によつて到達せられた勢力均衡の新狀態を表はすものであつて、英國勞働黨のそれに較らべて、一そう安定的である。かような事實は、やがてドイツ共產黨が英國のそれに比して、遙かに廣汎な大衆の上に影響力を持つばかりでなく、遙かに廣汎な大衆を現實に黨員とする大衆的政黨に發達した事實と照應する。けれどもドイツの場合といへども、ドイツ共產黨と社會民主黨との間に、共同戰線を形成することが必要であり、そして可能であつた限り、この範圍においては、社會民主黨にはブルジョアジーの支配に反對する何らかの作用が殘されてゐたものと云はなければならぬ。

資本主義の社會形態は、その他のすべての社會形態と同じように、如何なる奇蹟的勢力によつても、唯だ一と押しで倒れることはない。若しそれが倒れるなら、それは倒れる日に倒れるのではなくて、

時々刻々に、常に倒れつゝあるからだ。言葉を換へて云へば、若し資本主義といふ五重の塔が倒れるとしたならば、それはこの五重の塔を支持してゐる部分々々の間の力の權衡が破れる作用と、これを種々なる方向から搖り動かし、または押し倒さうとする一切の勢力との總效果としてのみ——これらすべての作用の全體的な關係においてのみ——倒れるものである。かような意味で、すべての反ブルジョア勢力は、意識的に無意識的に、最終の結果に貢獻する。即ち資本主義の消滅は、社會層について云へば、同時にまたは次々に作用するすべての反ブルジョア社會勢力の作用の總効果によつて來り、鬪爭の發展から云へば、同時にまたは相次いで展開される鬪爭の種々なる發展段階の作用の、總効果として現はれる。そうしてかような作用の結合は、意識的に行はれる時に、云ふまでもなく最も効果的に行はれる。プロレタリアがその歴史的任務を有效に遂行するための正しい戰術とは、一方においては、ブルジョアジー自身の間の矛盾と對立の作用——權衡の破壞と自壞の作用——とを最大限度に促進すると同時に、あらゆる反ブルジョア的社會要素の作用を最大限度に發展せしめ、すべての發展段階に屬する鬪爭の效果を、最も有効に結合することに歸着する。そして一般には、普通の意味においての共同戰線、特別の場合としてはその特殊な一形態たる共同戰線黨は、かような結合の一つの方法、もしくは一つの形態にほかならぬ。

（五）英國からの若干の實例

英國における勞働階級政治運動の發達は、これらの點について、吾々に最も興味ある例證を與へてゐる。

十八世紀の末年から十九世紀の三〇年代にいたる英國は、中世紀的政治勢力の掃蕩によつてブルジョアジーの政權が確立され、そして全ブルジョアの上に、この政權の基礎が擴大せられた時代であつた。勞働者の産業上の不滿は、種々なる政治上の改革運動に結びつけられた。かうして勞働大衆は、ブルジョア政治運動に動員され、勞働者は初めて政治運動の舞臺に現はれたが、これらの改革運動は、新興商工階級の參政權の獲得と共に凋落した。

依然として參政權の外に取り殘された勞働階級の不滿は、中流下層の不平と結合して、普選獲得運動（チャーチスト運動）となつて現はれたが、この運動は、英國商工業の前に開けた光明に滿ちた展望と、勞働階級の生活が無限に改善せられるかの如き希望との前に消滅した。

一八五〇—六〇年代の英國勞働階級は、種々なる反勞働者法の適用による資本家および政府の暴壓に對して、法律上の改革を獲得するために鬪つた（組合主義政治運動）。この鬪爭において、英國の勞

働階級は、初めて勞働者自身の利害のために鬪つたものではあるが、彼らは尙ほ、ブルジョア政治勢力から獨立してゐなかつた。從つて、彼らは主として議會におけるブルジョア急進分子の力を借りて、その目的を達しようとした。そしてこの目的は、全たく資本主義の範圍内において到達しようとするものであつた。この鬪爭は、勞働組合の法律上の地位が確立され、有力な組合の組織と豐富な共濟基金とによつて、熟練勞働者としての優越的な地位を擁護する權利の承認を獲得したことによつて、勢ひ中和せられざるを得なかつた。

十九世紀の末葉から二十世紀の初頭になると、一そう廣汎な非熟練勞働者の擡頭と、社會主義運動との影響の下に、英國の勞働階級は、漸次にブルジョア政治勢力から離脱し、勞働黨の樹立によつて、初めて獨立した政治勢力を形成した。

この時代における英國の反ブルジョア的勢力は、第一には組合運動であつた。云ふまでもなく、組合運動は、一八五〇—六〇年代の熟練勞働者の政治意識と全く同一の水準にある要素から、社會主義の影響を蒙つた要素にいたるまでの、あらゆる要素を含んでゐた。次には社會民主主義（戰前の意味での）を綱領とする英國社會黨、修正派社會主義に近い綱領をもつた獨立社會黨とフェビアン協會のほかには、主として消費者としての小ブルジョア下層と勞働者とを代表する消費組合運動があつた。

これらの運動は、必ずしも共通の目標を追ふものではなかつたが、小くとも共通の方向を指してゐた。そしてこれらの運動の間に、意識的な協力が行はれてゐるとゐないとに拘らず、これらの諸勢力の作用は、英國におけるブルジョアジーの政治的支配に對する鬪爭の一部分を成すものであり、これらの諸勢力の作用とその相互作用との結合されたものが、當時における英國のブルジョア支配に對する反對勢力の總和であつた。言葉を換へて云へば、當年の英國に於ける反ブルジョア運動は、英國社會黨の運動、もしくは獨立勞働黨の運動、または組合勞働者の政治運動等々の、いづれの一つでもなくて、これらの全てを總括したものによつて代表され、これらの全ての運動の反ブルジョア的作用の結合によつて成り立つてゐるものであつた。そして以上の諸團體（英國社會黨を除く）によつて構成せられた勞働黨は、これらの反ブルジョア的政治要素の作用を、意識的に結合しようとしたものであつた。勞働黨はまた、地方勞働黨の組織を通じて、これらの團體に屬せぬ小市民層の有する反ブルジョア作用をも結合しようとした。

かように、その後の英國勞働黨が、よしブルジョア第三黨以外の何者でもないものに轉化したにもせよ、當年の勞働黨はそのうちに、反ブルジョア的作用を含む一切の社會的要素を包容し、これらの要素の作用を一つの組織に結合しようとしたところの、反ブルジョア共同戰線の黨であつた。

世界戰爭は、英國の形勢を著しく變化した。けれども少くとも一九二〇年には、レーニンはなほ、英國におけるかような共同戰線黨の意義と必要とを認めてゐた。これは當時の英國共產主義者が、勞働黨への參加に反對し、勞働黨に對立した宗派的な共產黨の組織を主張してゐたことをもつて、レーニンは英國における左翼小兒病の症狀と見做したことによつて、明らかであつた。それのみでない。レーニンは「ロイド・ヂョーヂとチャーチルとの聯合に打ち勝つためには、ヘンダーソン＝スノーデンを助けなければならぬ」と主張した。そして「これと異つた行動を取ることは（レーニンによれば）××の發展を困難ならしめる」ものであつた。かようにレーニンの見るところでは、當時の英國における階級鬪爭の發展段階においては、勞働黨を構成する諸要素（ヘンダーソンとスノーデンさへも！）は、なほ反ブルジョア的作用を殘してゐた。そして苟も反ブルジョア的な作用が中和し盡されないで殘つてゐる限りは、これを有りたけ用ひ盡さぬことは（ヘンダーソンとスノーデンにいたるまで！）××の發展を困難ならしめるものであつた。

一九二〇年以後についても、少くとも英國共產黨は、勞働黨を構成する諸要素がなほ反ブルジョア的作用を有するといふ事實を認め、そしてこれらの作用を、共同戰線黨の組織のうちに結合することの意義と必要とを認めてゐたものと解釋しなければならぬ。なぜならば英國共產黨は、勞働黨から分離してこれと對立する方針を改め、勞働黨に加入する資格を獲得するために、最近にいたるまで努力をつゞけてゐたからである。しかるに最近にいたつては、英國共產黨はこの努力を棄て、明白に勞働黨と對立する立場に復歸した。この政策の變化が、どの點まで、過去における誤つた對立政策の收獲として餘儀なくせしめられたものであつて、どの範圍までが、英國資本主義の狀況の急激な變化に照應した進出的な政策であつたかは、こゝでは問題外である。

（六）共同戰線の諸形態

單一無產政黨ないしは反ブルジョア共同戰線黨といふ思想は、わが國に特有の思想であつて、假りにかような政黨が實現し得られるとしたならば、それは吾が國に特殊な事情に基づくものでなければならぬと主張する人々がある。單一政黨の主張を支持する人々の間にも、その論據を、わが國の特殊事情にのみ求めようとする人々がある。けれどもかような見解は、根本的に誤つてゐる。苟もプロレタリア以外の階級または社會層が、反ブルジョア的作用を存してゐる限り、これらの一切の反ブルジョア的要素を動員し結合する共同戰線の黨は、いかなる時、いかなる處でも必要であり、また可能であつた。たゞに必要にして可能なばかりでなく、戰前の各國における勞働黨または社會黨の多くは、

事實上、單一な反ブルジ・ア政黨であつた。

私は以上の反覆した說明によつて、次の事柄を明らかにしようとした。

(一) プロレタリア以外の社會層がブルジョアジーの、特に現在においては帝國主義ブルジ・アジーの政治的支配に對立した利害を有する限り、これらの社會層は、反ブルジ・ア的作用を含んでゐる。すべてこれらの反ブルジ・ア的作用の効果とプロレタリアの階級目的を意識した鬪爭の効果との有効な結合は、ブルジ・ア政治支配に對する勝利のために、絶對に缺くべからざる必要條件である。

(二) ブルジ・ア政治支配の消滅は、プロレタリアの階級目的を意識した鬪爭のみによつて實現せられるものではない。一切の反ブルジ・ア的な、現實な具體的な當面日常の利害のためにする最も初步的な鬪爭を初めとして、階級意識の種々なる發展段階に屬する一切の鬪爭の効果と、最高の階級意識に基づき、そして究極の階級目標のためにする鬪爭との有効な結合は、ブルジ・ア政治支配に對する勝利のために、絶對に缺くべからざる條件である。そして

(三) これらの一切の作用を結合したものが、階級鬪爭發展のそれ〴〵の段階における、總體としての反ブルジ・ア勢力を形成してゐるものである。

以上の事實は、共同戰線黨または單一政黨を必要とし可能とする一般的な基礎となるものであり、從つてまた、單一政黨の一般的な基礎をなすものである。けれども、

(四) この結合は、必ずしも、常に意識的に、從つて最も効果的に行はれてゐるものではない。と同時に、この結合が意識的に行はれてゐない場合にも、客觀的には或る程度までは、無意識的、必然的に行はれてゐる。

或る一定の時期をとつて見れば、ブルジ・アジーの政治勢力を代表する黨は、例へば保守黨と自由黨、民主黨と共和黨等々のような、互いに對立抗爭するブルジ・ア分派に分れてゐるにも拘らず、すべてこれらの相扞格するブルジ・ア政治勢力の諸要素を總括して、全體としてブルジ・アジーの政治勢力、または一つのブルジ・アジーの黨と見做し得るように、また見做さねばならぬように、或る一定の時期における全ての反ブルジ・ア分派の諸政黨によつて、一つの反ブルジ・ア黨が無意識的に構成せられてゐると見ることができる。從つて、

(五) 前述の如き結合は、必ずしも共同戰線黨の形態においてのみ實現せられてゐるものではない。共同戰線黨は、この結合の最も意識的にして効果的な形態である。

例へば大戰後の多くの國々において見るように、社會黨または社會民主黨が(なほ反ブルジ・ア的

作用を存してゐる場合にも）もはやあらゆる反ブルジョア的要素を包容することのできない一定の『指導理論』の上に固定しきつた所では、單一共同戰線黨は、事實上、實現せられない。共産黨もまた一定の『指導理論』に基づく組織であつて、共同戰線黨のうちに溶解することはできぬ。從つて前述の如き、性質の固定した社會民主黨と、これに對立して起こつた反ブルジョア黨、例へば共産黨との場合にも、これらの反ブルジョア作用の結合は、單一な共同戰線黨の形においては行はれないで、一時的部分的な共同戰線の形成によつて行はれる外はない。そしてこの種の結合形態が、實踐の上で、概して効果的でなかつたことは、爭ふことのできない事實である。これに反して、社會黨または社會民主黨が、共同戰線黨たる實質を保つてゐる場合には、前衛黨そのものは、このうちに溶解し去ることはできないにもせよ、前衛分子が共同戰線黨に參加することにより、または英國の勞働黨のような構成方法の取られてゐる場合には、團體的加盟の道によつて、單一な共同戰線黨と前衛黨とが、おのおのその本來の性質を保ちつゝ並存して、その作用を結合することができる。

以上の事柄は、勢ひ、共同戰線黨の性質について、次のような諸點を力說することを必要ならしめる。

（一）共同戰線黨は、階級鬪爭のそれ〴〵の發展段階における、一切の反ブルジョア的要素を包容する。

共同戰線黨がこれらの要素を包容するといふ意味は、たゞにこれらの要素の利害を代表するばかりでなく、現實にこれらの反ブルジョア大衆をその組織のうちに包容することを意味してゐる。けれども如何なる社會要素が、當然にかゝる共同戰線のうちに包容せられるかは、階級鬪爭の發展段階によつて異つて來る。

（二）共同戰線黨は、これらの諸要素の、ブルジョアジーの利害と對立した當面の現實な利害のためにする鬪爭をもつて結合の條件とする。從つて、一定の『指導原理』（例へば社會民主主義、共産主義等々にもとづく社會變革の全過程に亘る謂ゆる原則的の綱領）を有しない。

これらの鬪爭の間に、大衆の意識は絶えず發展し昂揚する。けれども共同戰線黨たる本質を失はぬ限り、それは反ブルジョア大衆の、かような現實具體的な利害のためにする鬪爭と、これに照應した最も初步的な意識とから、全く離脫することはできぬ。

（三）かゝる性質の政黨は、必然にそのうちに、左翼的傾向と右翼的傾向とを包容する。

例へば共産黨のような、最も嚴密な意味において一定の『指導原理』を結合條件として成立してゐる黨内においてさへも、左右兩翼の對立が生じ、現に各國の共産黨がそのために分裂してゐることを

考へたなら、共同戦線黨の内部には、左右の兩傾向を生ずることは、その本質上當然のことであつて、寧ろ左右兩翼の傾向を包容するからこそ、そして包容し得るからこそ、初めて共同戦線といふことができる。從つて共同戦線黨は、左翼的影響と右翼的影響との相對的な大きさによつて、或は左翼「的」であり、或は右翼「的」であり得るが、謂ゆる「左翼黨」でも「右翼黨」でもあり得ない。統一的な共同戦線黨を目標としつゝ、同時に「左翼政黨」たらんとし、または「左翼政黨」をもつて自任することは、そのこと自體が無意味であつて、單一な共同戦線黨の本質についての、完全な理解の缺乏を表白してゐるものにすぎぬ。

かような本質の結果として、共同戦線黨の場合には、左右兩翼のあることは、一定の「指導原理」の上に立つ黨の場合のように、必然に分裂を意味するものではない。若し共同戦線黨がそのために分裂するとしたならば、それは主として、指導者の不明のためであるか、または左からにせよ右からにせよ、共同戦線黨をして、共同戦線黨の限界を越えしめようとする、不當な試みの行はれた結果である。

かような性質の黨は、右翼政黨化する（流行の言葉をもとつて云へば、社會民主主義の黨に變質する）危險はないか？　私は「右翼政黨化する」といふ言葉の意味を、反ブルジョア的な作用を減退しまたは喪失するといふ意味に解しよう。そして慥かに、危險があると答へたい。世の中には「左翼政黨」といふレッテルを貼つた政黨は、このレッテルのために何時でも品質が保證せられて居り、社會民主主義に轉落する恐れは斷じてないと確信する素朴な人々がある！　すべての反ブルジョア黨には、右翼政黨化する危險がある。一つ以上の社會層を含む共同戦線黨にあつては、この危險は甚だ多いといふことを、私は力説したいと思ふ。

現在は反ブルジョア的作用を蓄へてゐる種々なる社會的要素の各々が、必ずしも同じように、階級闘爭の發展の最終の段階に達するまで、その作用を保つものでないことは、既に指摘した通りである。假りにA、B、Cの三つの社會層から成る共同戦線黨があるとする。そしてA、Bの社會層は、階級闘爭の發展のそれ〴〵の段階において、反ブルジョア的作用を中和し盡されたとしたならば、これらの要素は、漸次に共同戦線黨から脱落し、共同戦線の範圍は縮少される。さもなくば、これらの要素に對する妥協のために、この反ブルジョア共同戦線黨は、多かれ少かれその性質を變ずるに違ひない。かような社會階級上の變化のために、共同戦線黨の構成要素の範圍が縮少するとしたならば、これは當然の變化であつて、何らの弊害でもなければ、またこれを阻止する必要もない。たゞ必要なことは、反ブルジョア共同戦線の黨たる本來の性質を擁護することである。卽ち詳言すれば（一）反

ブルジ・ア的作用を有するいづれかの要素を包容し得ないような性質の政黨に變質せしめぬこと、(二)これらの要素のいづれをも、早期的に――即ち、その反ブルジ・ア的作用を充分に發展し盡さぬうちに――脱落せしめるような性質の政黨に變質せしめぬこと、(三)その内に包容するすべての要素が、その作用を完全に發揮することを妨げるような性質の政黨に變質せしめぬことである。

共同戰線黨のかような本質は、その内部に於ける前衛分子の任務を、極めて重要なものとする。けれども共同戰線黨の内部における眞實の左翼的分子の任務は、共同戰線黨を、共同戰線黨の限界を越えて「左翼政黨」に變質せしめることではなくて、眞實の共同戰線黨たる性質を擁護することにある。

(七) 共同戰線黨とプロレタリア黨

既に所定の紙數に近づいたので、この重要問題については、簡單に言及するに止どめよう。

わが國における前衛黨または前衛的分子(をもつて自任する人々)の共同戰線黨に對する見解には、大凡四つの變化(または動搖)があつたもの〻如くに見える。

第一の時期は、共同戰線黨は前衛黨の存在(當時の用語を借れば、「主體の確立」)によつてのみ、初めて意義を持つといふ見解が取られた時期であつた。謂ゆる「結合の前の分離」はこの「主體確立」の方法であつて、この目的のためには、共同戰線黨組織の行程が犠牲にされた。この見解は、一方においては、前衛黨と共同戰線黨との意義の密接な關係を認めつ〻、他方においては、共同戰線を實現せしめる過程と、前衛の任務とを結合することを知らなかつた。

第二の時期は、前衛黨と共同戰線黨との關係を、機械的な支配と被支配の關係と解し、共同戰線黨を、前衛黨の無力を補ふための一機關と見做し、または事實上、前衛黨の代用物とした時期であつた。その結果は、共同戰線黨をして、反ブルジ・ア共同戰線の組織たる本質を失はしめ、これを前衛黨と自任するもの〻統制に最も都合のよい手頃な組織に變質した。前衛黨と大衆的共同戰線との觀念上の混淆も、この時期の特徴であつた。

第三の時期は、共同戰線黨の必要が、原理的に否認せられた時期であつて、第四の時期は、原理的には無用な共同戰線黨は、具體的には必要である(!)――言葉を換へて云へば、前衛黨の潰滅狀態は、共同戰線黨を必要ならしめた――といふ見解、さらに言ひ換へれば、共同戰線黨(勞働者と農民と無産市民の現實な利害を代表する政黨)をもつて、前衛黨の代用物と見做す見解が、彼らの一部の人々によつて採用せられ初めた時期である。

以上の見解は、悉く誤つてゐる。これらの見解は、互ひに相反してゐるにも拘らず、同一の誤謬を

もつて一貫せられてゐる點においては、互いに一致する。

前衛黨は、すべての活きたものと同じように、即席に鑄造せられるものではなくて、環境との反作用のうちに生長するものである。前衛的分子が僅かに散在するに過ぎない狀態から、完成され成熟した前衛の黨にいたるまでの間には、無數の中間的な階梯と生成の程度がある。けれども前衛的任務は、成熟した前衛黨の出現によつて、初めて突如として生ずるものではない。前衛的分子は、かような生成と發達とのあらゆる時期において、常に前衛的任務を持つてゐる。それ故に、成熟し完成された黨といふ意味での『主體』の存しないあらゆる段階においても、いな最も初歩的な段階においてさへも、萠芽的な形態と程度とにおいては、主體（少くとも主體的見地）は既に存するといふことができる。そして前衛的分子は、この見地に立つて、如何なる環境においてもそれに適應して行動することができる。かような理解の缺乏が、わが愛すべき『前衛』(!) 諸君をして、共同戰線黨の出現に脅やかされて初めて主體の無確立狀態に心附き、卽席料理で前衛黨の膳立てを急がしめたことは、解放運動史上のユーモアと云つてよい。

共同戰線黨を前衛黨の代用物とする思想は、前衛黨の存在をもつて、共同戰線黨否定の理由とする見解と同じように、無產者運動における前衛黨の特殊な位地と、共同戰線黨の特殊な任務とに對する、二つの無理解を、一石二鳥的に暴露するものに過ぎぬ。

前衛黨は反ブルジョア大衆の上に影響力を持ち得るように、共同戰線黨の上にも影響を與へることができる。けれどもその影響は、その戰術と指導の正しいことを大衆に實證した結果としてのみ生ずる精神的影響力であつて、如何なる場合にも、直接な機械的な支配であつてはならぬ。

前衛黨はまた、共同戰線黨をその勢力の貯水池となし、このうちから成員を徵募する源泉とすることもできる。けれども共同戰線黨は、そういふ約束の下に組織せられるものではない。それは丁度、共同戰線黨が、前衛黨によつて指導せられるといふ宿命的な約束をもつて、それに都合のいゝように構成せらるべきものでないのと同樣である。

共同戰線黨と前衛黨との關係には、後者が前者の上に有力な精神的な影響をもち、これを同一の方向に指導し得る場合から、兩者が對立抗爭する場合にいたるまでの、程度を異にする種々なる狀態を豫想することができる。けれども如何なる場合にも、共同戰線黨の作用は、前衛黨の作用に、意識的にまたは無意識的に結合されなければならぬ。例へば英國の現在のように、勞働黨（假りに共同戰線黨と見做して）は英國共產黨によつてブルジョア第三黨以外の何ものでもないものと認められ、激烈な對立の狀態にあるが、この場合といへども、勞働黨が政權を握ることは、英國共產黨に取つて必

要缺くべからざることであつて、英國共產黨の作用は、勞働黨のかような作用と結合されて初めて充分な効果をもつことができる。共同戰線黨と前衛黨との間に、どのような關係が保たれるかは、要するに階級鬪爭の發展の段階の如何と、前衛黨の戰術の如何とにかゝつてゐる。言葉を換へて云へば、共同戰線黨が、プロレタリアの階級目標への作用を含んでゐる程度、若しくはその反ブルジョア作用の中和せられた程度如何といふことゝ、前衛黨がこの作用を、それ自身の作用に意識的に結合するために取るところの戰術または方法の正しさとにかゝつてゐる。

(八)單一政黨の實現は可能であるか?

各國における無產階級運動の足跡と經驗とを蔑視する人々は、共同戰線の黨としての單一無產政黨の主張を、或る特異な主張であるかの如く考へる。事實は反對であつて、共同戰線黨は、すべての國における無產階級運動のすべての發展段階とすべての情況とを通じて、苟も無產階級が究極の勝利を得るためには必要欠くべからざる、最も平凡な、最も一般的な原則を根據とするものであつて、單一共同戰線黨は、それが實現せられる一つの形態にほかならぬ。共同戰線黨の主張が特異な理論ではなくて、かような一般的な原則であり、一般的な必要であるといふ事實を明白に認めることは、共同戰線黨の性質と任務とを明白に理解する第一の條件であると云つてよい。

そこで私は、共同戰線黨の性質を、主として、かような一般的な根據から說明することを試みた。けれどもかような一般的な原則は、前述のように、必ずしもこれを明白に意識した共同戰線黨としてのみ實現せられるものではない。のみならず、階級關係や經濟上政治上の形勢の如き客觀的な條件がそれを可能とする場合においてさへも、單一共同戰線黨は必ずしも、いつでも一〇〇%に實現せられてゐるとは限らない。言葉を換へて云へば、それは當然に共同戰線黨に包容せらるべき要素を包容しつゝあるない場合もあるし、甚しい場合には、一つの共同戰線を形成すべき諸要素が、對立競爭する黨派に分かれて居り、從つてこれらの要素の反ブルジョア作用の結合が、全く無意識的に、從つて非效果的にしか行はれてゐない場合もある。そしてかうした反ブルジョア作用の結合が最も非效果的に行はれてゐる場合には、そのために『××の發展を困難ならしめる』ことさへもある。

そこで單一共同戰線がどの程度に實現せられるか(卽ち、共同戰線黨の可能と必要の程度如何)といふことには、一般的な根據以外に、その時とその所とにおける特殊な條件のあることは云ふまでもない。わが國の場合には、大凡そ次の如き種々なる情勢の結果として、共同戰線黨を可能とする客觀的な條件も、これを必要とする程度も高いと云ふことができる。——卽ち一般的には、階級鬪爭の未

發展であつて、(一)ブルジョア・デモクラシーが發達しなかつたゝめに、より多くの社會層が反ブルジョア作用を中和し盡されてゐないこと。然るに帝國主義時代の金融資本の政策は、これらの社會層の利害を同化するよりも、寧ろ分化せしめること。(二)階級鬪爭の實際の發展は、勞働階級や勞働農民の大衆が、根本的原理的な指導理論(または原則綱領)について決定的に去就を迫られるような、また去就を決し得るような形勢にまで、切迫してゐないこと。(三)勞働階級の內部が(少なくとも先進資本主義國の場合と同じほどには)勞働貴族たる熟練工と不熟練工とに分裂してゐないこと。(四)無產政黨樹立運動以前に、共同戰線黨からブルジョア第三黨に變質した政黨が、つとに固定化してゐなかつたこと。(五)しかるに資本主義發展の客觀的な情勢と先進分子の階級意識とは、反ブルジョア的諸要素の作用を意識的に統一結合する必要を認識し得る程度に發達してゐること、等々。

× × ×

すべての反ブルジョア要素を單一な組織に結合する共同戰線黨が可能であるといふことは、これを不可能ならしめる社會的條件が存しないといふ意味であつて、必ずしも、それが必然的宿命的に實現されるといふ意味ではない。

單一共同戰線黨を可能とする理由について、私が今日以前に幾度びも繰り返して主張し來つたことは、今日も尙ほ有効であつて、この期間のうちに、わが國の形勢に、何らかの根本的な變化があつたと認めることはできぬ。プロレタリア以外の社會層のうちに、なほ反ブルジョア的作用が蓄積せられてゐること、これらの要素が、一定の排他的な指導原理に基づく黨派として固定化してゐないこと、ことに反ブルジョア的作用を失つた社會的要素(例へば農民、小市民層の一部分、勞働貴族化した熟練工など)がブルジョア第三黨に變質した政黨に固定化してゐないこと、そして經濟上政治上の狀況が、これらの要素の鬪爭力の結合を迫つてゐること、對立諸黨の構成要素がほゞ同一であつて、その分野が社會的階級的條件に深い根抵をおいてゐないこと等々は、一般的に、單一な共同戰線黨を可能にする條件と見做される。

他方においては、對立狀態の繼續は、それだけ各々の政黨を固定化し、ことに戰線の統一を妨げる主觀的な條件を造り出してゐる。例へば社會民衆黨の指導者が、社會民主主義政黨たることを公然と宣言するにいたつたことは、慥かに分裂狀態がそれだけ固定化したことを意味するものであつて、民衆黨の全體をも包容する統一戰線の實現は、この範圍においては、障害が增大したと云ふことができる。けれどもこの障害は、現に民衆黨を支持してゐる大衆の大部分は、少くともこれらの指導者の希望する程度には、社會民主主義黨に固定化してゐないといふことによつて割引される。(最近におけ

る社民黨の動搖を見よ）（註）。

無產政黨のほかに、プルジョア第三黨といふ意味での社會民主黨は、わが國においても成立の可能がある。けれどもプルジョア第三黨が、反プルジョア共同戰線黨の一構成要素を成さぬことは、云ふまでもない。從つて、共同戰線黨の外に、プルジョア第三黨といふ意味での社會民主黨の出現することは、反プルジョア共同戰線黨の問題の範圍外にある。

新勞農黨は、謂ゆる「戰鬪的統一戰術」の傳統に愛着するものゝ如くに見える。けれども舊勞農黨が、いまや「勞働者と農民と無產市民との利害のために現實に効果的に鬪爭する」合法政黨として再現したことは、大衆の必要と要求とに對して、指導分子が原理的に讓步したことを意味してゐる。從つて戰線統一の問題についても、大衆の要求が、指導分子の讓步をよぎなくするに至ることは、必ずしも豫期し得られぬことではない。新勞農黨が、眞實にかつ誠實に、かような鬪爭目標を追求する限りは、それは單なる共同戰線黨たることに歸着するものであつて、自ら「左翼政黨」と呼ぶことは、左翼的言辭によろ快感のほかに、何らの意味もない。少くとも新勞農黨が、合法政黨を原則的に否定する態度を棄てゝ、合法政黨として現はれたことは、すでに統一戰線の分野が擴大したものである。

しかるに他方においては、金融資本の政策の露骨な遂行は、ます〳〵廣汎な社會層の利害との間に

深刻な對立を造つてをり、ます〳〵廣汎な社會層の利害を、現實な反プルジョア作用に變化しつゝある。その結果として、現存の無產諸政黨の分量が、未組織の反プルジョア大衆に對する、相對的の大いさを縮小することは、現在の對立狀態の重要さをも縮少する。

× × ×

單一共同戰線黨の實現は可能であるか？ 慥かに可能である。單一共同戰線黨の實現は必要であるか？ 疑ひもなく必要である。この必要は、大衆を驅つて、戰線統一の問題を、再び當面の問題たらしめるに違ひない。けれども可能なことの大部分が、多くの場合、誤謬のために不可能となつてゐる。新興階級が獨立の政治勢力に結成せられるためには、いづれの國においても、長い年月を必要とした。ひとり吾が國のみが、その例外たることはできぬ。無產政黨の現在の對立狀態と、統一運動の僅かな經驗とをもつて、單一共同戰線黨の不可能を立證することは、現狀の維持をもつて唯一の生命とする保守的な指導者にのみふさはしい役割である。大衆は常に、現狀の打破によつて、今日の難解の問題をも、明日は容易に解決する。けれどもそれと同時に、若し過去における經驗と失敗とに、吾々を說得する力がないとしたならば、戰線統一は、來るべき機會においても同じく夢想に終るだらう。大衆的な共同戰線黨に對する吾々の準備は、大衆的共同戰線黨そのものに對する、明確にして動搖のな

い理解から始めなければならぬ。（昭和四年十一月二日）

（註）『社會民主々義の大旆の下に進む社會民衆黨と、共產主義を指導理論とする左翼政黨（卽ち共產黨――筆者）は夫々確固たる理論的基礎と、その統一とを得て存在する社會的必然性を有する……』しかるに『日本大衆黨の如き中間黨は、それ自らが左右に崩壞して右二黨のいづれかに屬するに至る宿命を持つてゐる』――これが社會民衆黨を、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主々義黨に固定せしめようとして焦慮しつゝある指導者たちが、さきの七黨合同に加へた批判であつた。

しかるにこの統一的存在の『社會的必然性』をもつところの社會民衆黨は、最近における前後二回の分裂と、さらに第三次の分裂に脅やかされつゝあるといふ事實によつて、他の無產諸政黨に對する社會民衆黨の對立的な存在には、指導者諸君の主張するような、何ら『社會的必然性』らしいものゝ無かつたこと、卽ちその對立的な存在は、何ら社會階級的基礎の立に根據を持つものでなかつたこと（かの指導者諸君の推論法に從へば）を、決定的に立證した。

それと同時に、このことは、次の如き吾々の見解と主張とを、決定的に證據だてたと云ふことができる。卽ち――（一）現在、分裂對立した無產諸政黨は、その分裂對立の分野が、決して社會階級的の基礎（指導者諸君の謂ゆる「社會的必然性」）と一致し照應してゐないといふ意味において、未だなほ固定してゐないもの、常に變化と動搖のうちにあるものであつて、從つて（二）現在の無產諸政黨の分裂對立の狀態は、わが國における無產政黨の形成――卽ち、獨立した無產者政治勢力の結成――の過程における一つの段階、または一つの場面にすぎぬ。そこで若し、無產政黨の現在の分裂對立の狀態と『社會的必然性』（卽ち社會階級的の基礎）との關係が何らか問題となるとしたならば、それはかの指導者諸君の主張するように、現在の政黨分野が『社會的必然』の上に立つてゐるのではなくて、指導者諸君の意識と努力とが、政黨の分野が『社會的必然』に一致することを妨げてゐるといふことにある。（校正に當りて）

昭和五年一月廿五日印刷
昭和五年一月三十日發行

定價五十錢

文藝戰線叢書
第二篇
單一無產政黨論

著者　山川均
東京市外杉並町高圓寺六一一
發行者　石井安一
東京市小石川區林町四三
印刷所　共働印刷生產組合

發行所
東京市外並杉町
高圓寺五五三
文藝戰線出版部
振替東京五九三八七

文藝戰線叢書

定價各冊五十錢

1・**員章を打つ**（創作集）
山本勝治著　内容・員章を打つ十姉妹、荒療治異母弟への贈物、毀れた義足等々

2・**單一無産政黨論**
山川均著　本著は、マルクス主義立場よりなせる合法無産政黨論だ、必讀の好著

3・明治初年の**政治的農民一揆**
田村榮太郎著　現在の農民爭議と比較して見ても少しもの戰術上のソン色なし、他一篇

4・**續刊**

323
474

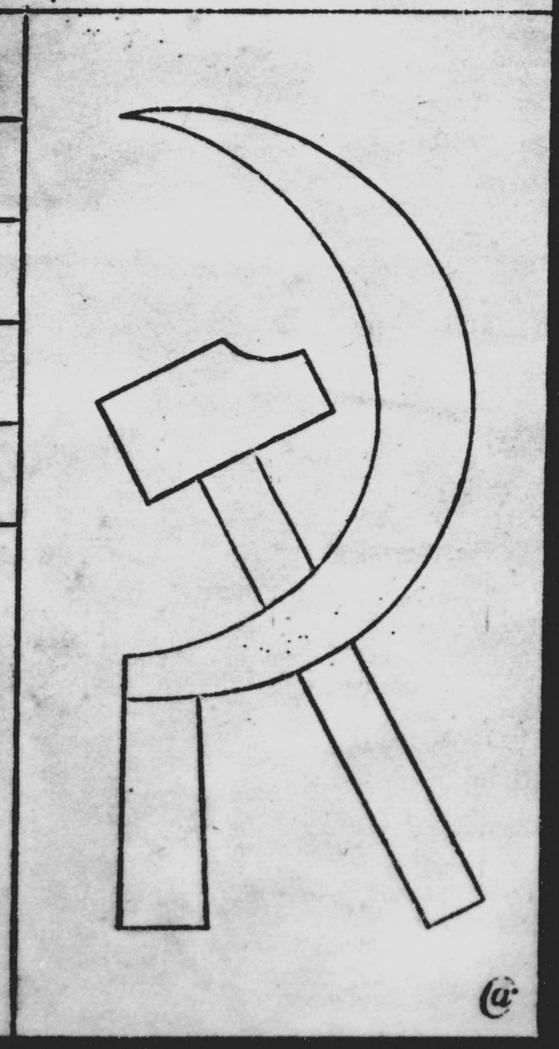
文藝叢書

定價各册五十錢

1	2	3	4
自然主義	經濟政策論	地方自治と農民	戀
上田敏	上田貞	田村栄太郎	平田禿木

單一產無政黨論

山川均
著

50セン

文藝戰線社出版部刊